

「ハリウッド映画プロデューサー」

ダン・アレックス殺人事件」

竹村 直久

登場人物

坂尾 登 (25) 小説家志望

善悟 沙夕 (22) 登の彼女。大学生

琴野 成行 (24) 登の同期。出版社員

ダン・アレックス (76) 映画プロデューサー

エリザ (56) ダンの妻

ノーマン (26) ダンとエリザの息子

ジム (24) ダンの養子

スカーレット (24) ジムの妻

キョーコ (22) ダンの養女

クリップ・マーロン(4?) 私立探偵

舞台は抽象的な空間である。
その場面ごとに置かれるテーブルや椅子等の小道具
によつて異なる空間になる。
外部から人物が入り出す場合のドアはどの場面
においても上手にある。

一、マンションの一室

沙夕がいる。
呼び鈴が鳴る。

ドアを開くと成行である。

沙夕「琴野先輩」
成行「よう、久しぶりだな」
沙夕「どしたんですか今日は」
成行「こないだ預かった原稿持って来たんだ、あいつは？」
沙夕「病院行ってるんです」
成行「どっか悪いの？」
沙夕「頭」
成行「頭？」
沙夕「精神分裂症つて言うんですか、誰もいないところで一人
でしゃべってたりするんです（楽しそうに話す）」
成行「どんな風に」
沙夕「自分が書いてる小説の登場人物が出て来て話しかけてく

るって言うんですけど、要するに妄想に耽つてるって言うか、もしこの人物が実在したらこんな感じなんじゃないかなアなんて考えてるうちにそれがどんどん具体的に
なつてきて、もしあいつがここに居たら、たぶんこう言う
うだろうって思うでしょ、それに対して自分が答えてみ
ると、またその答えに対して妄想の人物が自分に答える
の、それにまた自分が答えるっていうふうに繰り返し返して
会話が成立する訳、もちろん自分一人の頭の中だけのこ
となんだけど、最近それに歯止めがきかなくなつてね、
エスカレートして自分でも恐くなつてきたらしくって、
精神科の医者に行つて来るって」

成行「そんなにひどいの？」

沙夕「ええ、たまに私が買い物から帰つて来たりした時、部屋
の中から話し声がするんですよ、誰かお客さんなのかな

成行「あいつ昔から少しあぶなかつたからな、とうとう発狂し
たかな」

沙夕「普段から半分狂ってますけどね」

成行「あいつ相変わらずバイトもしてないんだろう」

沙夕「はい、何もしてませんよ」

成行「沙夕ちゃん学校へはちゃんと行ってるの？」

沙夕「だいたい」

成行「4年で卒業出来そう？」

沙夕「まアナントカだいじよぶなんじゃないですか」

成行「じゃ今んとこ沙夕ちゃんのバイトと仕送りだけか、あいつはしょーがないヤツだな、ここだつて家賃高いんだろ
う」

沙夕「まア苦しいですけどね、ナントカやってますよ」

成行「いつまでもこのままって訳にもいかないだろう」

沙夕「でもけっこう楽しいんですよ」

成行「俺登が3年で中退した時、沙夕ちゃんともきつと別れる
と思つてた。今さらこんなこと、言いたかないけどさ、
沙夕ちゃんが登のこと好きなら好きでついてくのもいい、
けどあのヤローにもう少ししつかりしてもらいたいよ
な、これじゃまるつきりあいつ沙夕ちゃんに喰わしても
らつてて、男のクセに沙夕ちゃんがいなきや生活出来な
いじゃないか」

沙夕「だけど私幸せだもん」

成行「あいつ、やさしいか？」

沙夕「（首を横に振る）私、誕生日にピンクのリボンが欲しい
つて、もう何年も前から登さんに言つてるんだけど、な
かなか買つてくれないの」

成行「ピンクのリボン？」

沙夕「うん、私ね、昔占い師に手相を見て貰つた事があるの、
ホラ、よく新宿とかで街角に座つてる人いるじゃない、
それでね、その時まで私、高校生だつただけど、その
占いのおじさんの言うには、将来あなたは、誕生日の日
に男性からピンクのリボンをプレゼントされるだろう、
そうしたらきつと、あなたはその男性と一生幸せに添い
遂げることになるだろうって」

成行「そのリボン、オレのプレゼントじゃ、ダメなのかな」

沙夕「（笑う）」

成行「ねえ沙夕ちゃん、登のこと、嫌になつたら、いつでもオ
レんとこ来ていいんだぜ（男の声）」

呼び鈴の音。

沙 夕「あつ、登さん帰って来た」

ドアを開けると登が入って来る。

沙 夕「お帰り、琴野さん来てるよ」

登 「おー成行、来たか」

成 行「原稿読ませて貰ったよ」

登 「面白かっただろーこの野郎」

成行は鞆から原稿を出して登に渡す。

成 行「ああ、なかなか」

登 「それで、社長には見たのか社長には」

成 行「一応ね、面白かったってさ」

登 「出版出来そうか」

成 行「今一歩だな」

登 「えっ、どうして」

成 行「シチュエーションもいい、ストーリーもいいんだけどさ
ア」

登 「だけど何」

成 行「結末」

登 「結末？ これじゃ気に入らないって？」

成 行「どうもハードボイルドって言うよりは後味の悪さが残る
んだよなア」

登 「それじゃどうしろって言うの」

成 行「ちよつと書き直せば良くなるかもしれないって言った
よ」

登「そんなもん冗談じゃねえよ、いいよ、じゃ他の出版社あたるから、いいよもうお前、帰れ」

成行「よく考えてみるよお前、うちの社長は見込みがあるって言うてるんだぞ、ちよつと書き直せばお金になるかもしれないんだぞ」

登「金なんか問題じゃないよ」

成行「少しは自分で稼ぐことも考えたらどうなんだ」

登「何だこの野郎」

成行「だつてそうじゃないか、こんなヒモみたいなこといつまでも続けてる訳にもいかないだろ」

登「誰がヒモだつたんだよ、沙夕がそう言ったのか」

成行「沙夕ちゃんとは関係ないよ、俺がそう思うからそう言うんだ」

登「大きなお世話だこの野郎、とつとと帰れ」

沙夕「ちよつと、登さん」

登「いらねえんだよお前なんか、帰れ帰れ」

成行「俺は苦労して社長に取り入ってやつたんだぞ、もうお前の為になんか何もしてんないからな、バカバカしい」

登「ああ何もしてくれなくて結構だよ、ホラ、とつとと帰れ」

成行、憤懣やる方なく出て行く。

登「お前、あいつに何か言ったのか」

沙夕「何も言わないよ」

登「ふん、結末を変えろだと、分かりもしないクセに・・・映画プロデューサー・ダン・アレックス殺人事件！ダン・アレックスは幼い頃に両親を亡くし、難民船に乗ってただ一人ニューヨークへやって来たイタリアからの移

民だった。やがて彼は、様々な苦労を経て一代でハリウッドの映画プロデューサーとして成功を収める。そしてオフ・ブロードウェイの優秀な無名俳優たちを養子として迎え入れて、巨大なる芸能ファミリーを築き上げていったんだ……」

暗転。

二、ダン・アレックス家

ダンとエリザを中心に、客席に向つて扇状に椅子に座っている、ジム、スカーレット、ノーマン、キョ

ーコ。

ダン「それでは、オーディションについて説明したいと思う。契約の期限は明日の正午じゃ、それまでにどうしてもわしは配役を決定しなければならん。同じ家族の中で役を競うのは辛いことかと思うが、お前達は今、俳優を志してここにいるんだ。だから今日だけは、お互いにライバルとして、全力を出し切つて頑張つて貰いたいと思う。わしはあくまでも平等に、皆の芝居を評価するつもりじや。それではオーディションの組み合わせを発表します。まず一組目、ジム、スカーレット、キョーコ」

呼ばれた三人はそれぞれ立つて返事をし、また座る。

ダン「そして二組目はノーマン、キョーコ、スカーレット。いいね、わしの審査によって配役が決定した時には、例え誰が選ばれても、又誰が落ちても、わし達が家族であることに変わりはないんじゃないか、またお互いに手を取り合い、励ましあつてこの映画を完成させようじゃないか、いいね皆」

一同「はいっ、パパ！」

エリザ「では一度解散してオーディションは一時間後に一組目から始めます。皆いいわね、最期の役作りをして下さい」
一同「はいっ、ママ！」

ダンとキョーコは別の方へ、それにジムとスカーレットは肩を抱き合つて何か話しながら各々部屋から出て行く。

舞台にはエリザとノーマンの二人きり。

ノーマン「ママー僕怖いよ、上手くないかないよ、きつと上手くないかないよー」

エリザ「何を言つてるの、そんな弱気なことどーするの」

ノーマン「だって、僕、僕自信ないより、きつとダメなんだ」

エリザ「黙んなさいっ、ノーマン今さら何をうるたえてるの」

ノーマン「だって、パパが僕に主役なんかくれる訳ないよ」

エリザ「そんなことないわよ」
ノーマン「だって、パパは僕のことが大嫌いだって言つてたんでしょ」

エリザ「大丈夫よ、心配ないわ、全部ママにまかせておけばいいの、大丈夫よ、きつと貴方が受かるわ」

ノーマン「ホント？ ママ」

エリザ「ええ本当よ、だからいいこと、自信を持つてしつかりやんなさい」

ノーマン「うん、分かったよ、だけどオーディションの相手役がキョーコで良かったな。だって僕、キョーコが相手なら、ホントの恋人同士の様に演じられる様な気がするんだもん。だから今度の映画の相手役は、キョーコに決まるといいんだけどナ」

エリザ「ダメです、キョーコは」

ノーマン「どうしてだい」

エリザ「どうしても、ママがダメと言ったらダメなのよ」

ノーマン「だってそんなの、分からないじゃないか、誰にやらせるか決めるのはママじゃなくてパパなんだから」

エリザ「そうね、でも相手役のことなんてホントはどうでもいいことだわ、とにかくママは、何としても貴方に主役をや

らせます。さ、こつちへ来て、最期の練習をするのよ」
ノーマン「うん、ママ」

二人、部屋を出て行く。

ジムとスカレット来る。

肩を抱かされていたスカレットがスツとジムの手を解いて離れて座る。

ジム「どうした」

スカレット「・・・いよいよね」

ジム「うん、大きなチャンスがつかめるかもしれない」

スカレット「大きいなんでもんじゃないわ、商業ベースのハリ

ウッド映画に主演出来るかもしれないのよ、世界中で上映されるわ、一夜にしてスターだわ、貧乏にさよなら、

苦勞にもさよなら、ビバリーヒルズの白い家に住むわ、ガレージにはキャデラック、もちろん運転手付きでね、田舎の両親を呼んで一緒に暮らすわ」

ジム「この家はどうする」

スカーレット「もちろん、おさらばするに決まってるじゃない、そ、もうくだらない大家族ごつこともさよなら」

ジム「そして、僕ともさよならか」

スカーレット「何を言うのよ、そんなことあり得ないわ、決まってるじゃない、やあね、ジムったら」

抱き合う二人。

スカーレット「二人で取るのよ、主役の二人を、貴方と私とで、

そして全てを手に入れるわ」

ジム「ずい分欲張りなんだな」

スカーレット「だって、そうなったら、こんなに素敵なことつてないと思わない？」

ジム「うん。でもどちらか一人だけでも受ければめつものだと思わなくちゃ、僕等は居候なんだから」

スカーレット「嫌よそんなの、私は絶対にこの役を取るわ、主演女優以外には考えられないわ」

ジム「ふふ、凄い気迫だな」

スカーレット「当たり前じゃない、それでなくってどうするのよ」
ジム「だけど、そんなにムキになっただって、いい芝居なんか出来やしないと思うけどな」

スカーレット「ジム、どうしてそんなに落ち着き払っていられるの、あの苦しかった生活忘れたの？ 毎日パンと牛乳だけで、タバコ代までケチって、家賃払ったり、稽古場借

りたり」

ジム「僕は結構楽しかったけどなア」

スカーレット「あんな情けないこと私はもうごめんだわ、女優になりたくない、女優、女優、女優！」

黙って肩を抱くジム。

スカーレット「きつと、きつと二人で主役を取るのよ、ノーマンなんか問題じゃないわ、私だってキョーコになんか負けないわ」

頷くジム。

二人去る。

哀しみを帯びた音楽入って。

キョーコが歩いて来る。憂いを秘めた表情でしばし佇み、そしてゆっくりと歩き去る。

エリザが登場し、中央に立つて客席に一礼する。

エリザ「では審査を始めます。まず一組目、それが終わったら引き続き二組目の方、始めて下さい。ではどうぞ」

エリザが去ると芝居が始まる音楽が鳴る。

マイラ（スカーレット）がとぼとぼと歩いて来る。通り過ぎるトラックの轟音と共にヘッドライトの眩しい光がマイラの顔をよぎって行く。

走るトラックに飛び込もうとするマイラの気持ちが高まって来たところでロイ（ジム）とキティ（キョーコ）が走って来る。

※ジムは上手いがスカーレットは演技がオーバー過ぎる。キョーコは一生懸命。

ロイ「マイラー！」

とマイラーの腕をつかむ。

マイラー「ロイ！ キティ」

キティ「マイラー、ああ、無事で良かった」

ロイ「マイラー、君は酷い、僕に黙って行ってしまうなんて」

マイラー「やめてロイ、どうして私を黙って死なせてくれなかったの、こんな私を、貴方に見られたくなかったのに」

ロイ「よしんだ、君は生活に困っていたんだ。生きる為には仕方なかったんだ。過去に何があつたって、君は君じゃ

ないか、僕が愛しているのは今日の前にいる君以外の誰でもないことには変わりはないんだ」

マイラー「でも私、お母様に本当のことを話してしまったのよ」

ロイ「何故だ。黙っていてくれれば良かったのに」

一瞬、ロイを見つめたマイラーはロイを突き飛ばす。

マイラー「そんなこと出来なかった。私には、あんない方達を騙し通すことなんて、きつと出来やしなかったわ」

ロイ「それなら、僕と母さんだけの秘密にしておけば良いじゃないか」

キティ「ロイ、貴方自分の言っていることがどういうことなのか分かってるの？ 貴方マイラーにこれから一生涯貴方の家族に後ろめたさを隠して生きていけつていうのね、酷い人、

貴方本当は、もうマイラのこと愛してなんかいないんだわ」

ロイ「違う」

キティ「いいえそうなんだわ、結局貴方は、いいとこのお坊ちゃんなのよ、何よりも家柄と名譽を重んじる。そうよ、身寄りもないゴミみたいな売春婦を妻として迎えるなんてこと、絶対にあり得ないんだわ」

マイラ「やめてキティ、私、やつぱり死にたいわ」

キティ「ダメよ、どんなに苦しくつたつて、やつぱり私達生きな くちや、さあ行きましょう。そのうちきつと、良い事もあるわ」

マイラを連れ添って歩いて行くキティ。

呆然と立ち尽くしているロイ。

二人が去ると芝居を終えて去るロイ（ジム）。

再び芝居始めの音楽が鳴る。

マイラ（キョーコ）がとぼとぼと歩いて来る。茫然自失した様なその表情。

通り過ぎるトラックの轟音と共にヘッドライトの眩い光がマイラの顔をよぎって行く。

走るトラックに飛び込もうとするマイラの気持ちが高まつて来たところでロイ（ノーマン）とキティ（スカーレット）が走って来る。

※ノーマンの演技は爆笑モノ。キョーコは上手くはないが、何か切実でリアルな迫力がある。スカーレットも大げさな演技が幸いしてはまり役。

ロイ「マイラ！」

とマイラの腕をつかむ。

マイラ「ロイ！ キティ」

キティ「マイラ、ああ、無事で良かった」

ロイ「マイラ、君は酷い、僕に黙って行ってしまうなんて」

マイラ「やめてロイ、どうして私を黙って死なせてくれなかったの、こんな私を、貴方に見られたくなかったのに」

ロイ「よすんだ、君は生活に困っていたんだ。生きる為には仕方なかったんだ。過去に何があつたって、君は君じゃないか、僕が愛しているのは今日の前にいる君以外の誰でもないことに変わりはないんだ」

マイラ「でも私、お母様に本当のことを話してしまつたのよ」

ロイ「何故だ。黙っていてくれれば良かったのに」

一瞬、ロイを見つめたマイラはロイを突き飛ばす。

マイラ「そんなこと出来なかった。私には、あんない方達を騙し通すことなんて、きつと出来やしなかったわ」

ロイ「それなら、僕と母さんだけの秘密にしておけば良いじゃないか」

キティ「ロイ、貴方自分の言ってることがどういうことなのか分かつてるの？ 貴方マイラにこれから生涯貴方の家族に後ろめたさを隠して生きていけつていうのね、酷い人、貴方本当は、もうマイラのこと愛してなんかいないんだわ」

ロイ「違う」

キティ「いいえそうなんだわ、結局貴方は、いいところのお坊ちゃ

んなのよ、何よりも家柄と名誉を重んじる。そうよ、身寄りもないゴミみたいな売春婦を妻として迎えるなんてこと、絶対にあり得ないんだわ」

マイラ「やめてキティ、私、やっぱり死にたいわ」

キティ「ダメよ、どんなに苦しくつたつて、やっぱり私達生きな
くちや、さあ行きましょう。そのうちきつと、良い事も
あるわ」

マイラを連れ添って歩いて行くキティ。

呆然と立ち尽くしているロイ。

芝居を終えて去るロイ（ノーマン）。

ダンとエリザ、それに子供たちが全員出て来て元の
様に席に着く。

ダン「それでは、審査の結果を発表します。まずマイラ役から、

マイラの役は、キョーコにやっつて貰おうと思います・・・」

スカーレット「（立ち上がる）嘘よ！ 嘘だわ、茶番よ、私より

もこの小娘の方が上手いって言うの？ 冗談じゃないわ

よ、やり直してよ、そんなの間違ってるわ」

ジム「よさないかスカーレット」

スカーレットをつかまえるジム。

スカーレット「嫌よ、放してよ、なにさ、バカにしやがって、ふ

ざけんじゃないわよ！」

突然舞台全体が真つ暗になる。

ジムの声「何だ？」

ノーマンの声「てっ、停電だ、ママ、ママ何処、怖いよ」

エリザの声「ノーマン、ノーマン、何処にいるの、ママはここよ」

ノーマンの声「ママ」

ダンの声「落ち着きなさい、エリザ、早くロウソクを取って来る

んだ」

スカーレットの声「ジム、ジム何処なの」

ジムの声「スカーレット！」

耳を劈く4発の銃声が響く。

キョーコの声「キャーッ！」

ジムの声「何だ今の音、みんな大丈夫か？ あいたつ、誰だお前

は、何だこれ・・・」

電気が点く。

倒れているダン。

拳銃を手になっているジム。

スカーレット「ギャーッ！」

エリザ「あなた、あなたーっ！」

ノーマン「パパ、パパっ（ジムを見る）お前、キサマ、よくも」

拳銃を落とすジム。

ジム「待て、僕じゃない、違う、誤解するな、誰かが僕に渡し

たんだ、本当だ。さっきの銃声の後で、僕は誰かとぶつ

かって、そいつが僕の手にかか持たせたと思ったら拳銃

だつたんだ、本当だ！ 嘘じゃないっ！」

スカーレット「ジム、貴方まさかそんな」

ジム「君まで僕を疑うのか、僕がこんなことする訳がないじゃないか」

ノーマン「キサマ、よくも、よくも。パパを」

スカーレットはジムの庇つてノーマンの前に立ちはだかる。

スカーレット「違うわ、そうよ、ジムがこんなことをする訳がないわ、誰かがきつとジムに罪をなすり付けようとしているのよ、そうよ、そうよねジム！」

抱きつくスカーレット。

エリザ「ノーマン、救急車を呼んでちょうだい」

行こうとするノーマンを捕まえるジム。

ジム「待て、契約はどうなる、明日の正午までに決定してパパのサイン入りで会社に提出しなければ、パパの配役の決定権は無効になってしまうんだぞ、そうなたらこの中からハリウッド映画の主演俳優を出そうって言う。パパの夢も叶わなくなってしまうじゃないか。ノーマン、君だつてまたとないチャンス逃すことになるんだぞ」

ノーマン「そんなこと言つてごまかそうたつてそうはいかないぞ、上手いこと言つてキサマは。パパを殺した罪を逃れるばかりか、僕等をたぶらかして自分が主演を手に入れようつ

て魂胆なのか」

ジム「待て、話を良く聞くんた。いいか、もし例え本当にパパを殺したのが僕であつたとしてもだ、みすみす映画出演のチャンスまで棒に振ることはないじゃないか。いいかい、だからこうするんだ。契約書を書いてから撃たれたということにすれば良い、このことを知っているのはここにいる僕等だけだ。秘密にしておけば問題は無いだろう」

スカーレット「その通りだわ、むざむざ私達の大きなチャンスまで逃がしてしまうことは無いんだわ」

ノーマン「それもそうだ・・・」

エリザ「何を言っているのよノーマン！ ダンはもう死んでしまつたわ、契約のことなんて、もうどうでもいいわよ」

ノーマン「だけどもママ、僕らの中から主役を出して映画を作るの

は。パパの昔からの夢だつたじゃないか、せめて僕らの力でそれを実現させてあげようよ。ねえキョーコ、君も黙つてないで何とか言つておくれよ」

キョーコ「警察に知らせて！」

ノーマン「え？」

キョーコ「お願いよ、早く警察に知らせて！」

ノーマン「ダメだ」

キョーコ「どうしてよ人が殺されたのよ！」

ノーマン「分かつてる、でも、その前にやらなきゃならないことがある。誰の名前を契約書に書くかだ。マイラの役はもうキョーコに決まつてるからいいとして」

スカーレット「ちよつと待つてよ、ダンは死んだのよ、さつきの発表も無効にして欲しいわ」

ノーマン「何故だ、パパははつきりマイラ役はキョーコだと言つ

た。そのパパの意志は絶対に変えられないぞ」

スカーレット「じゃ、もしダンを殺したのがキョーコだったとしたらどうするのよ」

ノーマン「何？」

ジム「そうだ、何が契約だ、その前に絶対にハッキリさせておかなければならないことがあるじゃないか、パパを殺した犯人が誰なのか」

ノーマン「お前やないんか」

ジム「違うって言うてるじゃないかお前もしつこいヤツだな」
ノーマン「じゃ他の誰がやったって言うんだ」

ジム「ハッキリしてることはひとつ、この中にいるってことさ」
スカーレット「どうやって見つけるの」

キョーコ「警察を呼んで」

スカーレット「黙んなさい」

キョーコ「エリザ夫人」

エリザ「警察を呼ばずに、私達だけで犯人を見つけないことなんて出来るのかしら・・・そうだわ、私立探偵を呼ぶっていうのはどうかしら・・・」

ジム「それはいい考えだ。ちようと僕が腕の良いのを一人知ってるよ。田舎のお袋が僕の居場所を突き止める為によこしたヤツなんだけど、ヤツならもしかしたら、力になってくれるかもしれない」

ノーマン「よし、じゃその私立探偵つてのを呼ぼうじゃないか、だがその前にジム、君の疑いが晴れるまで縄で縛らせてもらおうよ」

ノーマンはロープを持って来てジムを縛ろうとする。

ジム「何をするんだ」
スカーレット「やめて」

ジム「よし分かった。スカーレット、心配するな、彼が来てくれればすぐに僕の疑いを晴らしてくれる筈だ」

縛られるジム。

ノーマン「その私立探偵の名前は何て言うんだ」

ジム「クリップ・マローンさ」

ノーマン「分かった。すぐ来てくれる様に電話して頼んでみるよ」

ノーマン出て行く。

暗転。

三、マンションの一室

テーブルで原稿を書いている登。

ドアを開けて買い物袋を提げた沙夕が入って来る。

沙夕「ただいま」

登「どうだった」

沙夕「あたし・・・留年しちゃった」

登「・・・」

沙夕「ねえ」

登「いいんじゃない、一年くらい、珍しくないよ、大学5年行くヤツなんて」

沙夕「うん、それはいいんだけどさ、お金がね、お父さん、もう仕送りも学費も出してくれないって、大学なんかサッサとやめて帰って来いって言われちゃった」

登「……………」

沙夕「どうしよう、暮らして行けなくなっちゃう……」

登「お前、大学出たいか」

沙夕「そりゃあ、やっぱり、せつかく今まで3年間通ったんだし」

登「俺も3年通ってやめたんだぜ」

沙夕「……………」

呼び鈴が鳴る。

沙夕、ドアを開けると成行である。

沙夕「琴野さん」

成行「（小声で）あいつ、いるの？」

沙夕「えっ、うん」

成行「そう、じゃ、また来るわ」

登「（気付いて）成行か？ 入れよ」

成行「いや、いいよ、帰る」

登「帰るって、この間悪かったな、まアいいじゃねえか、ちよつと入れよ、ちよつと一息いれようと思つてたところなんだよ」

沙夕「さ、どうぞ、入って下さい」

成行「そうか、じゃ、ちよつとだけ」

登「久しぶりに映画の話でもしようや、どうだ、最近映画観てるか」

成行「いや、仕事が忙しいからな、今日は俺、久しぶりに大学

に顔出して来たんだ」

登「おうそうか、どうだった大学は」

成行「うん、相変わらずだよ、何も変わってない、それより沙
夕ちゃん、留年したんだってな」

登「ああ、耳が早いな」

成行「どうすんだよお前、学費とか、沙夕ちゃんちそういうの
厳しいんだろ」

沙夕「うん」

登「お前に心配して貰わなくてもいいよ、そんなこと」

成行「じゃ、どうすんだよ、金あんのか」

登「だから大きなお世話だって」

成行「またそれか、まあそうだけど、少しくらい心配させてく
れよ俺だって・・・お前まさか、自分の為に沙夕ちゃん
まで大学中退させる気じゃないだろうな」

登「うるさいヤツだなお前、やつぱし帰れ」

成行「お前この子のこと何だと思ってるんだよ」

登「うるせえな、帰れ」

成行「登、いいか、いくら沙夕ちゃんがお前に惚れてるつつつ
てもなあ、お前にこの子の人生ズタズタにする権利なん
かないんだぞ、いくらなんでもあんまりじゃないかよ、
喰わして貰って、自分の生活費全部稼がして、その上学
歴まで棒に振らせる気なのかよ、少しは考えてやれよ、
それじゃあんまりじゃないかよ」

登「・・・そんなお前、熱くなるなよ、昔から全然変わってね
えな、まだ大学辞めさせるとは言ってるねえだろ」

成行「それでお前やって行けんのかよ」

登「うん、困っちゃったよなあ」

成行「金なんかないんだろお前」

登「うん」

成行「この間のお前の原稿書き直すの、もういつペン考え直して
みる気ないか」

登「うん、ないねえ」

成行「もしアレ直して、採用されて掲載が決まれば契約金が取
れるんだよ、その後文庫にして少しでも売れれば沙夕ち
やんの学費くらいにはなるんだぞ」

登「興味ないね」

成行「なんで！」

登「とにかく書き直しには興味ない」

成行「ちよつとくらい書き直すのが何で気に入らないんだよ、
よく自分の今の状況考えてみるよ、そんなこと言えた義
理じゃないだろう、金が要るんだろう金が」

登「バカにすんなよお前。金の為に自分の小説書き直せだと、

俺を何だと思っただよ」

成行「たかが二流の三文推理小説じゃないかあんなの、なんで

そんなにこだわるんだよ」

登「何！ ナメるんじゃないよこの野郎、俺はなあ、ダテに
親と絶縁して学歴棒に振ってまで女に喰わして貰ってる
訳じゃねえだぞ、何の為にそうまでしてやってきたと思
ってるんだ。書くと言うことが俺にとつてどんなことな
のか手前なんかに分かる筈はねえんだ。夢も希望もとつ
くに失って、ただ喰う為にだけセコセコ働く歯車に成り
下がった手前なんかになア」

成行「何を、偉そうにこの野郎」

登「書くという行為は俺の生きる意味そのものなんだ。俺の
作品は俺の存在証明だ。この原稿用紙は俺の存在なんだ。
コレが俺だ。この字、この文章、この結末が俺なんだ。」

つまりコレを変えらるともう俺じゃねえんだ。俺じゃねえもんはもう俺の作品じゃねえ、だからどんなことがあってもコレを変える訳にはいかねえんだ。分かったか」

成行「現実逃避だ！ お前はこの悲惨な現状を認めたくないもんだから、自分の中にそうやって勝手な理屈をこねくり回して現実から目を背け様としているんだ。よく見ろ、お前には他に何も無いんだ！ あるのはこの現実だ、この生活だけだ、最低だ！」

登「いいか、俺にはまだ命があるんだ。他の何を失つても人間が失つてはならない最後のものを俺はまだ持っているんだ。お前なんかもうとうの昔に放棄してしまった人間が人間である為に最も必要なものを俺はまだ大切にここに持っているんだ。それが何だか分かるか、恐らくお前にはもうカケラも残っていないものだ。そう、ここにあ

る、ポリシーだ！」

成行「ポリシー！ ポリシーだつてさ皆さん。聞きましたか、笑わせてくれますよねえ、ポリシーでメシが喰えますか、ポリシーで家賃が払えます？ 何処に？ 何処にあるんだポリシーが、どれだ、どんなのだ（登の身体をまさぐる）なんだコレは、チエルシーだ」

登「返せこの野郎、俺のチエルシーだぞ」

成行「ホッラ、悔しかったら取ってみろ」

登「返せこの野郎、返せっ」

逃げ回る成行。

登、諦めてドアの方へ。

沙 夕「何処行くの？」

登「チエルシー買って来る」

登出ていく。

溜め息をついて座る成行。

うな垂れる沙夕。

成行「沙夕ちゃん、元気出しなよ、ねえ、ホントにもう、あん

なヤツのことは放つといてさ、俺んどこ、来ないか？」

沙夕「ありがとう、でももうそれも、出来なくなっちゃったの」

成行「えっ、どうして」

沙夕「私、あの人に言えなかった」

成行「何？・・・まさか・・・」

沙夕「うん、妊娠しちやったの」

成行「どひゃあ！」

暗転。

四、ダン・アレックス家

ロープで縛られて座らされているジム。

寄り添ってジムを気遣うスカーレット。

ダンの死体にはシートが被せられており、その傍ら

にエリザとノーマン。

隅にひとりキョーコ。

呼び鈴の音。

ノーマン「はい（と行く）」
マールンの声「私立探偵のクリップ・マールンです」
ノーマン「どうぞ（ドアを開ける）お待ちしました」

クリップ・マールンが入って来る。

ジム「クリップ！」

マールン「やあジム、驚いたよ、サウス・ストリートのアパートから姿をくらましたかと思っただらこんなところにいたとはな」

ジム「これにはちょっと訳ありなんだ」

マールン「ふん、あれからどれだけ捜したと思ってるんだ。マンハッタンの端から端までお前の住みそうな安アパートをしらみ潰しだ。まさかこんなお金持ちのお屋敷にのうの

うと納まっていようとは思ひもしなかったからな」

ジム「悪かったよ」

マールン「まあいいさ、これでローレンス夫妻にも報告が出来る。

俺の面目も立つし、調査費用も入るって訳だ。助手に給料が払えて嬉しいよ、リーガンを知ってるだろう。もう2週間も給料の支払いが遅れちまってるね、今にも仕事を放り出して出て行っちゃまいそんな勢いなんだ。電話借りるぜ」

ジム「ちょっと待ってくれよ、こつちの話は聞いてくれないのかい」

マールン「（見て）集団でS.M.パーティーかなんかじゃないのか、ホラ、今流行の」

ジム「よしてくれよ、ノーマン、君は電話で何て説明したんだ」
ノーマン「僕は何も言ってないよ、ただジムが貴方を呼んでいる

つて言ったら一方的にこっちの住所を聞いてすぐ切っちゃったんだ」

ジム「クリップ、実はかくかくしかじかなんだ」

マーロン「ふん、それで警察は呼んだのか」

ジム「いいや」

マーロン「何故呼ばない」

ジム「それはかくかくしかじかだからだ」

マーロン「死体は？」

ジム「あの隅だよ」

マーロンはダンの死体を見る。

マーロン「三八口径、左胸、首筋、腹部、左手、4発か・・・恐らく即死だったろう、拳銃は？」

ノーマン「これです（と見せる）」

エリザ「犯人を、犯人を貴方に見つけ出して欲しいんです。この

中にいるんです。この中の誰かがやっただんです。恐ろし

いことだけど」

マーロン「犯人はジムでしょ」

ジム「冗談じゃないよ！」

マーロン「あいにくだがお断りするよ。私は今死体を見てしまっ

た。しかもこれが他殺体であることは明らかだ。私には

見てしまった以上警察に知らせる義務がある。黙ってい

たら私立探偵の免許を取り上げられておマンマの喰い上

げだ。悪く思わんでくれ、電話を借りるぞ、さつきも言

ったが」

ノーマン「ちよつと待ってくれよ、頼むよ、力になっておくれよ、

貴方には迷惑はかけないから」

マーロン「今こうして電話をかけるのを邪魔すること自体、私には迷惑だ」

エリザ「貴方の名前を警察には言わないわ」

マーロン「犯人を見つけ出した後か、しかし皆が黙っていても犯人がしゃべるだろう」

ノーマン「今のうちに約束しておけばいいんだ。皆いいか、犯人になってもこの人のことはしゃべりつこなしだぞ」

マーロン「バカかこいつは」

エリザ「お願いします。礼金はたっぷり差し上げますから」

マーロン「無理だね、一時の金はあってもその先で仕事にあぶれるのはごめんだからな」

ノーマン「これだけ言ってるのに何故引き受けてくれないんだ。

頼むよ、お願いだから」

とマーロンに拳銃を突き付ける。

マーロン「何のつもりだ」

マーロンはノーマンの腕をねじ上げて銃を取り上げる。

ノーマン「痛たたた」

マーロン「子供のオモチャじゃないんだ（弾倉を開けてみる）まだ弾が残ってる。こんなもの子供に持たせちゃいけませんね」

とエリザに渡す。

マーロン「じゃ、悪いが私はこれで帰らせてもらうよ」

帰ろうとするマーロンの腕を、隅にいたキョーコが来てつかむ。

立ち止まるマーロン。

キョーコ「クリップさん、助けて、私を助けて下さい……お願いです」

そのすがる様な瞳に打たれたマーロン。しばし舞台中央で見つめ合う。

マーロン「君は……東洋人か」

キョーコ「混血です、日本人との」

マーロン「ふうむ……（考え込む）後に私の違法行為がバレた

として、司法官のお偉方を丸め込むのに……そう、エリ

ザ夫人、その時のお偉方の言い値プラス私への調査費用

と言うことでどうかね」

エリザ「もちろん結構ですわ」

マーロン「恐らくそれ程安くはないと思いますがね」

エリザ「ご心配なく、大丈夫です」

マーロン「いや、ちよつと待って下さい、もし貴方が犯人だつた

としたら誰が私に支払うんです。うん、そうなるはず

い、ではあらかじめ今の時点で2万ドルの小切手を切つ

ておいて貰えますか」

ノーマン「2万ドルだつて？」

マーロン「司法官の袖の下は高いからな、だがそれだけあれば充分だろう。それが法外だと言うのなら上限を決めておき

ましよう。1万ドルでどうです。もしそれより司法官の言い値が安ければその差額は私への礼金。プラスαだ。もしそれ以上なら残りの1万ドルから差し引きして残りは貴方にお返ししましょう。それでどうです」

エリザ「結構ですわ、宜しくお願いします」

マーロン「ではさっそく始めましょうか、まず皆さんには全員隣の部屋へ行ってもらいます。私を犯行現場に死体と二人きりにして下さい。暫らくしたら名前を呼びますから呼ばれた方は一人ずつ中へ入って下さい。そうして一人一人からお話を伺います。ではどうぞ皆さん」

ジム「クリップ、僕のこの縄はほどいてくれないのかい」

マーロン「今のところお前は一番有力な容疑者だからな、そのままでいた方が良いでしょう」

ジム「そんな殺生な」

マーロン「まあいいさ、後で話は聞いてやる。お前には他にも話したいことがあるからな」

マーロンを残して皆下手から出て行く。その時マーロンとキョーコはしばしじつと見つめ合う。
舞台にはマーロンとシートを被せられたダンの死体だけになる。

マーロン「初めましてダンさん。私立探偵のクリップ・マーロンです」

ダン「（呻く）ううん」

呻きながらムクツと上体を起こすダン。

マーロン「（客席に）驚かれたかな、私は死体と話が出来るんです。皆には内緒ですがね、とにかく事件を解決するにはこれが一番早い、要するに犯人は誰かを突き止めれば良い訳で、撃たれた本人に誰に撃たれたかを聞けばそれで一気に話は終わるという訳だ。ダン、アンタは一体誰に撃たれたんだい」

ダン「さあ、知らんな」

マーロン「何だつて？ ああ、そうか、撃たれたのが暗闇だったんで自分でも誰に撃たれたのか顔も見えなかったという訳だな」

ダン「そうだ」

マーロン「だからって大よその見当くらいはつくだろう、犯人はアンタの家族のうちの誰かさ、その中の誰かに命を狙われてたとか、こいつには殺されかねない程憎まれていた

とか」

ダン「さあ、分からんな」

マーロン「おいおい、ちよつと待ってくれ、いいか、俺はアンタを殺した憎き犯人を捕まえてやろうと言ってるんだぜ、それにしちゃアンタ、もう少し協力的でも良いんじゃないのか」

ダン「誰も、憎んでいるとは言っておらん」

マーロン「何？ じゃアンタ、犯人は捕まえなくても良いって言うのか」

ダン「その通りじゃ、誰も犯人を見つけ出してくれとは言っておらん。帰ってくれ」

マーロン「おやまあ、しかし私はアンタの家族に頼まれて、引き受けてしまったんだ。黙って帰る訳にもいかんだろう」

ダン「殺された本人が犯人は誰でも良いって言ってるんじゃない、

もうどうだつていいじゃないか」
マーロン「分かった、じゃ帰るよ」

マーロン、ふらふらと下手へ出て行く。
ダンは元のように自分でシートを被つて横になる。
ジムとノーマンとスカーレットに捕まつて戻つて来るマーロン。

ノーマン「何だよこの野郎、一度引き受けといてそれはないだろ、
帰るつてどういうことさ」

マーロン「ダンが犯人は捜さなくてもいいつて」

ノーマン「言つたつてのか、ふざけるなこの野郎」

ジム「そうだよクリップ、何もしないで帰るなんて酷いじゃないか」

スカーレット「貴方本当に私立探偵？ 詐欺師じゃないの、司法

官の袖の下だとか上手いこと言つて、お金だけ貰つて逃げ
るつもりだったんじゃないの」

マーロン「だからダンが」

ノーマン「何言つてんだよお前、頭パーじゃないのか」

スカーレット「そうよ、どうかしてるんだわ」

マーロン「分かったよ、分かったからもう皆わめくな！ 解決し
てやるよ、犯人は突き止めてやるから、それでいいだろ、
それまでは帰らんよ、約束する！」

凄い剣幕で三人を蹴散らすマーロン。
たじろぐ三人。

ノーマン「当たり前だよ・・・」

ジム「しつかりやってくれよな・・・」
スカーレット「ふん、大丈夫あの人」

三人ブツブツ言いながら下手へ戻って行く。

マーロン「おいダン、この場をどうしろって言うんだ」

ダン「ふむ、困ったことになったのう、ふはははははは・・・
と起き上がる」

マーロン「とにかく、犯人は捜すよ、その後で警察だの契約だの
ってことは奴等の問題だ。とにかく私は犯人を突き止めるよ、
でなきゃあの様子じゃここから帰れんからな。アンタは多分答え
えんだろうが一つだけ聞きたいことがある。
何故犯人を庇うんだ」

ダン「・・・・・・」

マーロン「これは私の推測だが、アンタは恐らく犯人が誰である
かを知っているんだろう。知ってて隠してるんだ。これがこの
事件の手掛かりの第一歩だ。奇妙な話だが、犯人はアンタを殺
したい程憎んでいるのに、アンタは殺されても憎めない程愛
している人物さ」

ダン「よせ、やめろ、私は、もうどの道長くはなかつたんだ。

医者から癌の宣告を受けていたんだ。撃たれなくても、あと半年の命
だったんだ。だからもういいんじゃないよ」

マーロン「何も心残りはないってことかい」

ダン「何も無いと言っては嘘になる。私は、死ぬ前にどうして
もこの映画を完成させたかった」

マーロン「哀愁、か」

ダン「そう、MG M映画、哀愁のリメイクはわしの長い間の夢
じゃった。只一つ、この映画を完成させてから死にたか

った」

マーロン「まあいい、アンタの話はまた後で聞くよ」

と下手へ行つて声をかける。

マーロン「エリザ夫人はいるかい、まず最初にエリザ夫人に来る

様に言つてくれないか」

座つてタバコに火を点けるマーロン。

ダン は再びシーツを被つて横になる。

エリザの声「エリザです」

マーロン「どうぞ」

エリザ、入つて来るとダンの側に来て寄り添う様に座る。

マーロン「私が勝手に質問しますから、貴方は思った通りに素直

に答えて下さい。いいですか」

エリザ「ええ、いいですわ」

マーロン「ではさつそくですが、犯人は貴方ですか」

エリザ「何ですつて？ 何てことをおっしゃるんですか貴方は」

マーロン「じゃ、貴方は誰が犯人だと思えます？」

エリザ「それが分からないからこうして貴方をお願いしているん

じゃありませんか」

マーロン「成る程、確かにおっしゃる通りだ」

エリザ「貴方つて、面白い方ね（嫌味）」

マーロン「それではジムが犯人である可能性はありますかとお思います

か」

エリザ「それはあると思いますわ、今のところその可能性が一番大きいんじゃないかしら、スカーレットと共謀してやったのよ」

マーロン「何故そう思うんです」

エリザ「あの二人はオフ・ブロードウェイの下積み時代から一緒だった夫婦です。私達からは想像もつかない強い絆があるんです。そう、一心同体とでも言うんでしょうか、今度の映画でも、必ず二人で主役を取るんだと言って、頑張っていましたから」

マーロン「つまり今度の殺人も、二人で主役を取る為に共謀して企てたと」

エリザ「そうです。だからあの審査の発表の時、マイラ役はキョーコだと聞いて半狂乱になってんですわ、きつと自分が

選ばれていれば、ダンを殺す必要はなかったんだと思うわ、そうよ、きつとそうなんだわ」

マーロン「貴方はダンを愛していましたか」

エリザ「ダンを私を絶望のどん底から救ってくれた人なんです。どんなに愛したって愛し足りないわ」

マーロン「分かりました。貴方の話をまとめるとこういうことですね、自分はダンを心から愛しているから犯人ではなく、自分としてはジムとスカーレットの共謀犯である可能性が一番強いと知っている」

エリザ「そうです。けど貴方の言葉には少し引っかけますわ」

マーロン「何がです」

エリザ「もしかしたら私が犯人である可能性もある様な口振りですもの」

ると思っっていますよ」

エリザ「そんな、失礼な」

マーロン「おや？ 勘違いして貰っては困るな、例え奥さんであろうと実の息子であろうと、ダンが撃たれた時この部屋にいた人物は全て容疑者だ。それがこの事件の捜査の大前提ですよ。だから貴方も決して例外ではない」

エリザ「まあ、それじゃ貴方は、ノーマンも容疑者の一人だとおっしゃるのね」

マーロン「無論です」

エリザ「酷い、少なくともあの子だけは絶対に別です。他の誰を疑っても、例え私を疑っても、あの子だけは絶対に別なんです。恐ろしいことを言わないで下さい」

マーロン「何故そう言い切れるんです」

エリザ「何故って、あの子はたった一人の、私とダンの実の息子

なんですよ」

マーロン「ふむ、まあいいでしょう。それはそれとして、そう感情的にならないで下さい。それではキョーコさんはどうです」

エリザ「あの子のことは、私にも分かりませんわ、あの子がここへ来てまだ一ヶ月足らずですもの。一体ダンは何処でどうしてあの子を見つけて来たのか、何故養女にしようなんて思ったのか、見当も付かないわ、だって、まるでお芝居の経験も無い様だし、それでいきなりレッスンを始めて一ヶ月で映画の主役に抜擢するなんて、ダンは余程どうかしていたとしか思えないわ。あの子は謎だわ、もしかしたらあの子の事情を調べれば、この事件の謎を解く鍵になるかもしれないよ」

マーロン「だがそう悠長なことも言っていられないだろう。契約

の期限は明日の正午だ」

エリザ「そうね、確かにそうだよ」

マーロン「どうも、貴方はもう行って結構です。次はジムに来る

様に言っして下さい」

エリザ「はい、分かりましたわ」

立ち上がり、行こうとするが。

エリザ「クリップさん」

マーロン「何です」

エリザ「これを（ポケットから出す）子供達の、皆の部屋の合鍵
です。何かのお役に立つかと思いましたが」

マーロン「屋敷の中を自由に調べても良いということですか。それなら貴方の部屋の鍵も」

エリザ「金色の一番が、私の部屋の鍵ですわ」

マーロン「そうですか、そりゃどうも」

エリザ「このことはどうかご内密に」

マーロン「ええ、分かっていますよ」

エリザ、下手へ出て行く。

途端に起き上がるダン。

ダン「キサマ、何てこと言っくんじゃ」

マーロン「何がだ」

ダン「仮にもわしの最愛の妻だぞ、それを犯人扱いするとは何
事か」

マーロン「誰も犯人だとは言っていないさ、疑いがあると言っただ
けだ」

ダン「疑うことも許さん」
マーロン「うるさい奴だな、死体は死体らしく黙っててくれないか」

縛られたままのジムが入って来る。

ジム「誰と話してるんだい」

※ダンが動き回ってもマーロン以外の人物にはダンの姿は見えない。

マーロン「ダンとき」

ジム「アンタ本当に大丈夫かい」

マーロン「多分な、まあ俺の心配はいいからそこへ座るんだ」

ジム「分かってるよ」

マーロン「いいザマだな」

ジム「面白いかい」

マーロン「ああ面白いね、お前には散々あちこちへ引つ張り回されたからな」

ジム「家にはもう知らせたのかい」

マーロン「ご覧の通りさ、ノーマンが電話をかけさせてくれないからな、ところでお前、いつの間に結婚したんだ」

ジム「半年程前さ、ダンさんにこの養子にならないかって誘われた時、スカーレットと別れたくなかったんで、妻がいるって言ったのさ」

マーロン「ローレンスさんには知らせたのか」

ジム「いいや」

マーロン「あれから一度も連絡を取ってないのか」

ジム「ああ」

マーロン「ローレンス夫人が病気で倒れたことは知っているのか」
ジム「えっ？ 母さんが」

マーロン「ふん、あきれた奴だな、ローレンス夫人は死ぬ前に一度いいからお前に会いたいと言っている。それでも帰ってやろうって気にならないのか」

ジム「帰るよ、今度の映画が終わったら」

マーロン「映画が終わったら、か、そう上手く役が取れば良いけどな、まさかお前、映画の主役どころか殺人犯の母親と言うレットルをローレンス夫人に貼りはしないだろうな」

ジム「そんな、違うよ、僕がやったんじゃないって言うてるじゃないか」

マーロン「まあいい、そう怒るな、お前のことはよく知ってる。

腐れ縁とは言え長い付き合いだ。お前が犯人じゃないことくらい俺には分かってるさ、え？ 何だつて（ダンに）いや、俺はこいつをよく知ってるんだ。人殺しなどやる男じゃない、じゃ何か、犯人はこいつか？ 断言は出らんのだろう、だったら黙っててくれないか」

ジム「誰と話してるのさ」

マーロン「何でもないさ、ちよつと耳鳴りがするだけだ。心配ないよ」

ジム「ねえクリップ、このロープを解いてくれよ、これじゃ鼻の頭が痒くつたつてかけやしない」

ジムの鼻をかくマーロン。

マーロン「まあいいじゃないか、お前がまだ縛られていた方が私

の捜査には都合が良いんだ。真犯人がまだお前が疑われていると思つて油断してくれるかもしれないからな」

ジム「そんなの酷いよ、捜査に利用するなんて」

マーロン「（考える）そうだな、このまんまローレンス夫人のところまで送り届けるというのもいいかもしれないな」

ジム「冗談じゃないよまったく」

マーロン「アーツハハハ・それはそうとジム、エリザ夫人と

ダンの馴れ初めについて知つてたら教えてくれないか」

ジム「アンタ私立探偵のクセにあんな有名な話知らないの？」

マーロン「いいから話せ」

ジム「エリザ夫人というのは、かつてのエリザ・フランクリン

で、克蘭ク・ケープルと共演した」

マーロン「ああ知つてるよその映画、大きな家が火事になつて馬がいなくなつたヤツだろう」

ジム「え？」

マーロン「口を挟んで悪かつたよ、いいから先を話してくれ」

ジム「で、その風と共に散りぬ、に大抜擢された後、数本の映

画に主演したんだけど、彼女その頃イタリアのネオリアリズムで活躍してた・・・」

マーロン「ちよつと待て、そのネオリアリズムと言うのは？」

ジム「アンタ映画のことも何も知らないんだな、イタリアに起こ

つた新しいタイプのリアルな映画のことさ、ホラあの、鉄道員とか、自転車泥棒とか」

マーロン「あの悲惨なヤツか」

ジム「ああ、で、その中で活躍してたロバート・ロッヘリーニつていう監督の映画に深く感動して、その頃結婚してた夫を捨てて单身その監督の元へ走つてしまつたのさ、それで向こうで結婚して、何本かその監督の映画に出演し

てただけど、その監督に若い女優の恋人が出来ちゃつてね、結局は捨てられてアメリカに戻って来た訳さ、でもその時にはもう、誰一人として女優としてのエリザに見向きもする人はいなかったんだ。それで彼女はもうもならなくなつて、ま、身から出た錆と言つてしまえばそれまでなんだろうけど、失意のどん底にいて生活にも困るあり様だったんだ。そこへ救いの手を差し延べたのが、風と共に散りぬを見て以来の彼女の大ファン、ダン・アレックスだったと言ふ訳さ」

マーロン「成る程な、良く分かったよ」

ジム「僕に聞きたいことはそれだけなのかい」

マーロン「もう一つ、お前はダンがマイラ役にキョーコを選んだことについてどう思うね」

ジム「悔しいけど、ダンの判断は正しいと思うよ」

マーロン「スカーレットが落とされてもか」

ジム「スカーレットは上手いけど、マイラ役には、ちよつと向かないよ、それよりも、キョーコは妙にはまつてると言うか、上手くはないんだけど、あのキョーコのマイラには、何か切実な迫力がある様な気がするよ。僕が見ててもそう思ったよ。彼女がここへ来る前、何処でどんな生活してたのかは、ちつとも知らないけど、ダンの目は確かだったと思うよ、キョーコは適役だよ」

マーロン「スカーレットが今の話を聞いたら悲しむだろうな」

ジム「うん、きつと只では済まないだろうね」

マーロン「彼女を愛してるか」
ジム「愛してるよ、でもそれと映画のこととは別問題さ、彼女もきつと、分かってくれるさ」

マーロン「ふむ、分かった。もう行つていい、次はスカーレット

を呼んでくれ」

ジム「ああ（と行くが）あ、そうだ」

マーロン「なんだ」

ジム「キョーコのこと話してたら思い出したんだけど、この前夜中にスカレットと中庭を散歩して部屋に帰ろうとした時に、ダンの部屋からキョーコが出て来るのを見たんだ」

マーロン「夜中に？」

ジム「そう、夜中に、何か事件の参考になるかな」

マーロン「うん、ありがとう」

ジム出て行く。

マーロン「スケベじじい」

ダン「バカ、何を誤解しとるんじゃ、わしを愚弄するのもいい加減にしろ」

マーロン「じゃ、夜中にキョーコさんと二人きりで何をしてたと

言うんです」

ダン「ふん、そんなことお前に話す必要は無いわい」

マーロン「言えない様なことですか」

ダン「だから違うと言つとるだろうこの野郎」

マーロン「まあいいでしょう、まだ先は長いんだ。徐々に説明して行けば分かるだろう。アンタが今ここで全部しゃべっちゃまつたんじゃ、謎解きのスリルが無くなるってもんだからな」

ダン「勝手なことばかり言いよつてからに」

スカレットが入つて来る。

スカレット「失礼します」

マロン「やあいらっしやい、どっか好きなところへかけてくれ」
スカレット「まだ犯人は分からないんですか？」

マロン「犯人はジムじゃないのか」

スカレット「違います！ 何を言ってるんですか、誰かがジムに罪をなすり付けようとしているんです」

マロン「じゃ君は真犯人は誰だと思っかね」

スカレット「キョーコだわ、キョーコがやったのよ」

マロン「どうしてそう思うんだい」

スカレット「私、見たんです。ジムと二人で、夜中にこっそり

キョーコがダンの部屋から出て来るところを」

マロン「ああその話ならジムにも聞いたよ」

スカレット「あの子、色仕掛けでダンをたぶらかして主役

を取ったのよ、そうに決まってるわ、でなきゃあんな素人をダン程の人が選ぶ訳ないもの。私の方がずっとずつとキヤリアも上だし上手いのよ、そうよ、これはそういうことなのよ、あの子、いい加減ダンを骨抜きにして、思い通り映画の主役を手に入れたんで、その瞬間に必要ななくなったダンを殺したんだわ、綺麗な顔して、一皮剥けば魔女なんだわ。どうですか、私の推理間違ってますか？」

マロン「いや、その可能性はあるね」

スカレット「そうですよ、これで捜査が大きく一歩前進したん

じゃありません？」

マロン「うん、まだそう結論を急ぐ段階ではないがね。ところでスカレット、私のことはジムからある程度聞いていると思うが、私は彼の御両親から彼の居所の調査と近況

報告を依頼されている。言わば彼の親代わりだ。そこで君に質問したいのだが、君は彼を本当に愛しているかね」
スカーレット「勿論だわ」

マーロン「ではあまり余談をしている暇もないんで単刀直入に聞
くが、君はもし、自分が女優と言う職業とジムの妻と言
う立場のいずれかの選択を迫られた場合にどちらを選ぶ
かね」

スカーレット「ナンセンスだわ、そんなことそういう場合が起こ
つてみなければ分からないわよ」

マーロン「ふん、成る程そう、いや、と言うのはね、私思うに、
どうも君とジムとの間にはそれぞれの芝居観というもの
について、いくらかの見識の違いがある様に思えるから
なんだが」

スカーレット「貴方が言いたいだよ」

マーロン「君は本当に主役にはキョーコよりも自分の方が適役だ
と思うのかね」

スカーレット「何ですって？ キョーコの方が私より上手いって
言うの？ ジムがそう言ったって言うの？ 嘘よ、冗談
じゃないわ、あんな淫売に舐められてたまるもんですか、
見てらっしゃい、誰よりも素晴らしく演じてみせるわ、
マスコミにもかつてのビビアン・リーを超えたと言わ
せてみせる。キョーコは殺人犯として起訴されるから当然
映画には出られないわ、それに元々実力で取った訳では
ないんだから、私がやって当然よ」

マーロン「成る程な、どうもありがとう。君はもう行つていい、
次はノーマンに来る様に言つてくれ」

スカーレット「（立つ）ジムの親代わりか何か知らないけど、私
貴方が嫌いだわ」

マーロン「とにかく嫌われやすい商売さ、勿論嬉しくはないがね」

マーロンにアカンベーをしながらスカーレット出て行く。

マーロン「彼女をどう思うダン」

ダン「・・・」

マーロン「ダン、死んじゃったのか（吹き出す）アツハハハハハ
・・・」

ノーマン入って来て不審そうに笑っているマーロンを見る。

ノーマン「大丈夫かいアンタ・・・」

マーロン「やあノーマン、よく来てくれたな、まあそのへんに座
ってくれや、ふぁゝあ」

と言って椅子にへたり込む。

ノーマン「どうしたんだよ」

マーロン「いやあ、頭を使う取調べが続いたんでね、いささか疲
れちまったのさ」

ノーマン「それで、どうなんだよ、大よその見当くらいはついた
のかい」

マーロン「うん。ま、今んとこキョーコの線が有力かな」

ノーマン「何だって！ キョーコが怪しいって？」

マーロン「ああ、どうやらダンとキョーコが特別な関係にあつた
らしいんだが、君は何か知っているかね」

ノーマン「何だよう、特別な関係って」

マールン「君は本当に何も知らないのか、夜中にダンの部屋からキョーコが出て来るところをジムとスカーレットが見たと言うんだが」

ノーマン「う、嘘だ！ そんなのデタラメだ、ジムとスカーレットは自分の犯行を隠す為に二人で嘘をついてるんだ」

マールン「君はキョーコのことが好きなのか」

ノーマン「うるさいなあ、そんなんじゃないよ、けどとにかく犯人はキョーコじゃない、ジムとスカーレットだ。あの二人が共謀してやっつたに決まってるじゃないか」

マールン「ママがそう言えって言ったのか」

ノーマン「何!?!」

マールン「君はママの言うことなら何でも聞くんじゃないのか?」

ノーマン「僕がやっつたって言うのか?」

マールン「その可能性もあると言っただけさ」

ノーマン「確かに僕は。パパには嫌われてたけど、殺すなんて大それたこと、考える訳ないよ」

マールン「君はダンに嫌われてたのか? それは初耳だな、どうして嫌われてたんだい、たった一人の实の息子じゃないか」

ノーマン「決まってるさ、僕は役者としては出来が悪いからさ」

マールン「何故だい」

ノーマン「それは・・・僕がバカだからだ」

マールン「成る程、それも原因の一端だったんだな、マザーコンプレックスの」

ノーマン「それを言うな! 言うな、いいか、二度とその言葉を口にしてみる、ただじゃ済まないぞ!」

マールン「ママに言いつけるか」

ノーマン「キサマー」

ノーマンはマーロンに飛び掛って行くが、マーロンに弾き返されてしまう。

マーロン「ダンを殺したのはエリザ夫人じゃないのか」

ノーマン「何だとオ」

マーロン「確かにお前は出来が悪そうだがエリザ夫人は一人息子のお前を溺愛していた。だから今度の映画の主役は是非お前にやらせたかったのだろう。しかしジムの方が芝居が上手いのは誰の目にも明らかだし、ましてやお前を嫌っているというダンがジムを差し置いてお前を選ぶ訳がない」

ノーマン「だから殺したって言うのか」

マーロン「そうだ」

ノーマン「役を取る為ならジムを殺した方が早いじゃないか」

マーロン「ジムには最初から殺人の罪を負わせるつもりだった。

それでお前とエリザ夫人にとって邪魔だった二人の人間を一度に無き者にすることが出来る」

ノーマン「言いたいことはそれだけか！」

マーロン「もう一つ聞くがエリザ夫人はダンを愛していたと言う

がそれは本当かね」

ノーマン「決まってるじゃないか」

マーロン「それは芝居か」

ノーマン「え？」

マーロン「いや、見ようによつては今の一言は下手な芝居の様に
も思えたのでね」

ノーマン「何を言うんだ、本当さ」

マーロン「うん。君はキョーコが好きか」

ノーマン「えっ？」

マーロン「好きなんだろう、さつき顔にそう書いてあった」

ノーマン「（顔を押しさえる）そんなこと、事件とは関係ないじゃないか」

マーロン「恋ってのはいいもんだぞ、何も恥かしがらる様なことじ

ゃない、君にはママと決別するのに良いチャンスじゃないか」

ノーマン「うるさい、大きなお世話だ。もう僕は行くからな」

マーロン「次はそのキョーコさんを頼むよ」

ノーマン下手へ出て行く。

途端にダンの泣き声が響く。

マーロン「さつきから一体どうしたって言うんだいダン」

ダン「（泣いている）」

マーロン「何を泣いているのか聞かせてくれないか」

ダン「（泣いている）」

キョーコ入って来る。

マーロンはダンと話したいがキョーコが来たのでやめる。

マーロン「やあキョーコさん、まあかけて下さい。最初に聞きた

かったんだが、君はあの時、私がこの事件を引き受ける引き受けないで採めてた時に、私に向って確か、助けて、と言っただね」

キョーコ「ええ」

マールン「確か、私を助けて、と」

キョーコ「ええ」

マールン「あれは一体、どういう意味だったのかな？」

キョーコ「早くこの事件を解決してほしかったんです」

マールン「成る程、では何うが、貴方は犯人は誰だと思えます？」

キョーコ「さあ、分かりません」

マールン「そう、それじゃ君が夜中にダンの部屋から出て来ると

ころを見たと言う人がいるんだが、それは本当ですか」

キョーコ「ええ、本当です」

マールン「中で一体何をしていたんだい」

キョーコ「・・・」

マールン「そう、答えられないか」

キョーコ「きつと貴方の想像している通りのことですわ」

マールン「フツ、君は思ったよりも可愛くないことを言う女だな。

あの時の、私へ向けたすがる様な瞳は演技だったと言
うのかね」

キョーコ「いいえ演技じゃないわ、貴方にすがりたい気分だった
の」

マールン「どういう訳で」

キョーコ「だから言ったじゃない、早くこの事件を解決して欲し
いからよ」

マールン「でも君は質問に答えない、つまり事件は早く解決して
欲しいが私には協力出来ないと、そういう訳だな」

キョーコ「その通りよ」

マールン「ひとつたちどころに事件を解決する上手い方法がある

んだが、聞きたくないか」

キョーコ「ええ聞きたいわ」

マールン「たった今君が犯行の全てを自供するんだ。それで事件

は全て解決さ」

キョーコ「いいわ、私が犯人です」

マーロン「つまらんな！」

キョーコ「どうして！」

間。

マーロン「・・・君は何か自暴自棄に陥っているらしいが、こちらにはほとんどその理由が見えて来ない。もつともこれは君が私の質問に答えない以上、君以外のところで探つて行くより他に仕方がないことなんだが、やっぱりこの事件の鍵はここにある様だな、つまりは君だ」

キョーコ「貴方の捜査に期待してるわ」

マーロン「その目だ」

キョーコ「・・・」

マーロン「さっき私に見せたのと同じ」

キョーコ「・・・」

マーロン「歯の浮く様なことを敢えて言わせて貰うが、私は君のその目がなかったら、こんなやつかいな事件に首を突っ込まなかった。分かるか」

キョーコ「ええ」

マーロン「私を失望させるなよ・・・じゃあ暫らく私を一人にしてくれ、今までの捜査を整理したいんでね、一時間後にもう一度皆ここに集まる様に言ってくれないか」

キョーコ「ええ、分かったわ」

キョーコ下手へ出て行く。

手帳に何か書き込みながら考えるマーロン。

ダン「おい」

マーロン「何だ、もう泣くのはやめたのか」

ダン「お前は、切れる男だ」

マーロン「仕事の要領さ、それよりどうだい、これで容疑者の全員から話を聞いた訳だが、勿論今の五人の中に犯人はいたんだろう、そいつの態度に何か感じなかつたか、例えばそいつの態度が頭に來たので気が変わって犯人が誰かをバラしたくなつたとか」

ダン「そんなことはないさ、しかしお前のことはよく分かつた」

マーロン「ほう、私のことね、それで、どんなことに気がついたんだ」

ダン「わしが何も話さんでも、お前はきつと犯人を捜し当てるだろう」

マーロン「仕事だからな、いや、今回は仕事と言うことを抜きにしても、事件を解決しなければこの屋敷を出られそうにないからな」

ダン「それで？ 大體の見当は付いたのか、犯人の？」

マーロン「十中八九はね」

ダン「誰だ」

マーロン「知ってるだろう」

ダン「頼む、言ってくれ、もし勘違いだったらえらいことになる」

マーロン「それなら正解を先に聞こうじゃないか」

ダン「ふん、その手には乗らんぞ」

マーロン「何故だい、いずれにしろ分かることだ。今言つたつて同じじゃないか、アンタ本当に誰が犯人か分かつてるのか」

ダン「……」

マーロン「そうか、そうだったのか、アンタは本当に自分が誰に殺されたのか分かってないんだ。ただ誰が犯人かを知ることが怖いんだ。犯人を捜すなど言うのはそういう意味か」

ダン「何を言うんだ、違う、そうではない」

マーロン「誰が犯人なのかを一番知りたかったのはアンタなんだ。そしてアンタが恐れてるのは、思い当たる人物が犯人であつてほしくないからだ」

ダン「……」

マーロン「遅かれアンタも知らなければならぬんだ。今ここで言つてやろうか」

ダン「待つてくれ、お前には本当に分かつてるのか、何故分かつたんだ、わしもずっとここで取り調べを見ておつたの

に、わたしには全く信じられん」

マーロン「直感さ」

ダン「直感じゃと」

マーロン「今のところは物証も状況証拠も無いが、これにはまず狂いは無いだろう。何故かと言われても困るが、経験とでも言つておこうか、いつもなら的を絞つたら裏づけ捜査をするんだが今回はそうもしてられないだろう。何しろタイムリミットが明日の正午ときてるからな」

ダン「ならどうするんじゃ」

マーロン「ま、多少骨は折れるかもしれないが、徹底的に追求して自白させるか、それともつと上手い手が何かあるかな。そうだ、この際アンタが無条件で捜査に協力すると言うのはどうだろう」

ダン「それはどういふことかな」

マーロン「つまり私の知りたいことでアンタが知ってることを百パーセント正直に教えて欲しいということさ」

ダン「よし・・分かった。わしももう、腹を据えることにしよう」

マーロン「そうか、なら真つ先に聞きたいのは他でもないキョーコのことさ、一体アンタとあの子とはどういう関係なんだ」

ダン「あの子は、わしの実の娘なんじゃ」

マーロン「そうだったのか、それでいろいろと辻褃が合うな、事情を詳しく話して貰えるかな」

ダン「うむ、あれは、今から20年程前のことじゃ、わしは日本を舞台にした映画を手掛けとつてな、何ヶ月か日本で暮らしたことがあるんじゃ、その時お京さんと言う芸者ガールと知り合つてな、一時は深い仲になつたんじゃが、

映画の撮影が終わるとわしはそれきりお京さんとは別れて帰つて来た。ところが、彼女は妊娠しとつたんだな、わしはその時、知らなかった。つい二ヶ月程前に、わしの娘だと言つて、キョーコが訪ねて来るまではな。その時は、もう驚いたのなんのつて、まるであの日のお京さんそのままのキョーコが、目の前に立つておつたんだからな・・だが、わしを頼つて来てくれたキョーコを、わしはそのまま引き受ける訳にもいかなんだ。なにしろわしには正式な妻と息子がおつたからな。それで実の娘として認知することは無理だつたんじゃが、キョーコは留学中に女優になりたいと言つて、わしを訪ねて来たことにして、養女にしたという訳さ」

マーロン「成る程、ではジムとスカーレットが言つてた、夜中に会つていたと言うのは」

ダン」それは、キョーコに、今までの経緯を聞いておつたんじゃない。わしと別れてからの、お京さんの生活。キョーコの生い立ちや、わしの存在を何で知ったか、またここへ訪ねて来るまでの経緯を。だがそれは、何と言うか、涙無しには聞けなんだ・・・わしと別れてから、お京さんは、日本の男性と結婚して、キョーコの他に子供を二人産んだそうじゃ、つまりそう、キョーコの弟と妹じゃ。だが不幸なことに、その男性は5年前に事故で死んでしまった。そんな時もしお京さんが知らせてくれとつたら、わしにもきつと何か、助けてあげることが出来たと思うんじゃないか、キョーコの話だと、実の父親であるわしは、もうとうの昔に死んでしまつたとお京さんには聞かされとつたそうじゃ。しかし女手ひとつで3人の子供を養つて行くと言ふのは無理な話じゃ、可哀相にキョーコは、そん

なお京さんを助ける為にずい分辛い思いをした様でな、自分の身体を売る様なことまで(涙ぐむ)・・・そんなもとうとうお京さんは、身体を悪くしてしまつて、去年の十一月に、息を引き取つたそうじゃ。お京さんも、きつとこの先弟と妹を抱えて生きて行かねばならないキョーコのこと余程不憫だつたんじゃないか、最後の最後の時になつて、キョーコがもう一生無きものと思つた実の父親の名を告げて息を引き取つたそうじゃ。わしは、お京さんに生き写しのあの子のことがもうどうにもならんくらい、いとおしくなつて、それで今度の映画の主演にも、抜擢したと言う訳じゃ。いや、あの役は本当はスカーレットに思ふとつたんだが、どうしてもキョーコにやらせたくなつた。いや、わしのイメージしつたマイラ役はキョーコだ。この映画はキョーコのために

作る様な気さえしてきた。これでわしとキョーコの関係のことは分かって貰えたかな」

マーロン「うむ、するときつきのキョーコは、彼女にとつて最後の望みであつたアンタを失つて落胆していたと言う訳か」

ダン「そうかもしれん」

マーロン「ではさつき、ノーマンと話をしていた時に泣いていたのは何故だ」

ダン「ノーマンが、わしに嫌われていると思つていたことを知つたからだ」

マーロン「本当は嫌つてはいなかつたというのか」

ダン「当たり前だ」

マーロン「じゃあ何故ノーマンは嫌われていると思つていたのかな」

ダン「それはきつと、エリザがそう思い込む様に仕向けたから

だろう」

マーロン「エリザ夫人が？ どうしてそんなことを」

ダン「エリザはノーマンを溺愛しとる。そう、父親であるわしからも奪い取つてしまいたい程にな」

マーロン「アンタから奪い取るつて？ それじゃエリザはアンタを愛してはいないのか」

ダン「分らん、そんなことは考えてもみなかつたよ。ただこれだけは信じてくれ、わしは今でも、エリザのことを誰よりも愛している。それは疑いもない事実だ。わしは、もしエリザに殺されたのだとしても、彼女を恨む気持ちにはこれっぽちも持つてはおらん」

マーロン「とうとう本音が出たな」

ダン「どうだ、犯人は分かつたか」

マーロン「いや、これでまたさつぱり分からなくなつたよ」

ダン「何じゃと？ それじゃキサマもともと、おのれ・・・」
マロン「待て待て、だがもうゴールはすぐそこさ、大体の目星は付いたんだが、犯人を確定するのは屋敷を一回りしてからでも遅くはないだろう」

とポケットから鍵の束を出して見せる。
暗転。

五、マンションの一室

沙夕と成行。

成行「沙夕ちゃん、それじゃ尚更今のままではいられないじゃないか、どうするつもりなの？ 自分のことなんだからしつかり考えなくちゃダメじゃないか」

沙夕「うん、よく分かってる」

成行「じゃあどうするの」

沙夕「・・・」

成行「なんであんなヤツが良いんだよ」

沙夕「ふっ、ホントそうね、いいところなんか何もないのに」

成行「俺こんなこと言うの、我ながら情けなくて仕様が無いけど、ホント不思議だよ。何で俺よりあんなヤツがいいんだよ」

沙夕「ちよつと待ってね、よく考えてみるから・・・何て言うかな、あの人の持つてる世界に入りたいの、ホラ、あの人がって何処か他の人と違ってて、何か一緒にいても一人

だけ別の世界に住んでる様なところあるでしょ、そこに私も一緒に入れて欲しいって言うか、よく分かんないけど、前に今よりすごく借金あつて、生活に困つてたことあつたのね、その時あの人、私を抱きながら言ったの、俺と二人で破滅へ向つて走つて行こうつて。笑つちゃうけどそういうのすごく好き。何故だか分かんないけど、すごく好き」

成行「それに比べたらきつと俺なんか、平凡で、ありきたりですまんない男なんだろうなあ」

沙夕「そんなことないですよ、琴野さんには琴野さんにぴったりの人がきつと見つかる筈ですよ」

成行「よくそう言われたよ、そうやって女の子はいつも俺のことを煙に巻くのさ」

沙夕「（おどけて）やくだ先輩そんな卑屈にならないで下さい

よ、それが一番いけないですよ」

成行「いいんだよ、どうせ俺なんかさ」

沙夕「そんなうホントにダメですよ、そんなこと言つてちゃ、登さんにだつてそういうところあるんですから」

成行「え？ 登に」

沙夕「そうですね、この際だから言つちやいますけど、登さんて、今だに高校時代に好きだった人のことが忘れられずに生きてる人なんです」

成行「あいつがかい？」

沙夕「例の推理小説の中にキョーコって人が出て来るでしょ」

成行「うん」

沙夕「京子って言う名前だったんですその人」

成行「それじゃあ」

沙夕「そうなんです、この小説に出て来るキョーコっていう人

は、登さんが高校時代に好きだった人のことがモデルになってるんです。だから結末も変えられなかったんです」

成行「そうだったのか・・・」

沙夕「登さん、ポリシーだとか、命だとかって偉そうなこと言ってるけど、結局はこの京子って女の人のことが全てなの、そうなの、この作品に限らず、他のにもいろんな形で出て来るわ京子って人。あの人にとつて、ポリシーと呼べるものは京子への思いだけなのよ。あの人が小説を書くのも、一字一句にこだわるのも、全ては京子の為、自分の中に巣食ってる京子像の為なの」

成行「今も？」

沙夕「そう、今も」

成行「でもそれじゃ、沙夕ちゃん」

沙夕「登さん、私には何も言わないわ、京子って人のことも私

が登さんの日記帳黙って読んで知ったんです。まだここへ越して来たばかりの頃、まだ登さんもその頃は大学へ行つててね、後から届いた登さんの荷物を私が整理してたら何の気なしに見つけちゃったんだけど、二日と置かず出て来るのよ、その京子っていう名前が、京子さん、今日はこんなことがあった。京子さん、僕はこう思う、京子さん京子さん・・・まるで届く筈のない手紙を書いてるみたいになんてが架空の人物を相手にした二人称・・・そう、私の入る余地なんかなかった。登さんが高校一年生の時、京子さんは三年生、つまり二つ年上のお姉さんでね、同じ文学部において登さんその頃はつい分可愛がられてたみたい、恋人同士なんて感じは全く無かつたらしいんだけど、登さんの方が本気で好きになっちゃつて、ラブレターを書いて出したらしいの、そうしたらその次

の日からパタンと京子さん学校へ来なくなつて、でもそれは登さんの出したラブレターが原因じゃなくて、偶然その日に交通事故に遭つて入院していたからだつたの。登さん毎日の様に病院に通つたんだけど、最初のうちは嬉しそうに迎えてた京子さんも、登さんがあんまり毎日の様に来るんで恐縮したのか、それともあつくるしくて嫌になつたのか、だんだん態度が邪険になつてきてね、ついには知らないうちに病院を変えて教えてくれなかつたり。京子さん入院期間が長かつたから同じ学年の人達と一緒に卒業するのが難しくなつてね、それじゃ何かとやりにくいから退院したら何処か他所へ転校することになつてたらしいんだけど、その転校先も教えてくれずに知らない間に退院していなくなつちやつたらしいの」

成行「そう、女つてそういう酷いこと、平気で出来るんだよな、

沙夕「ああ見えてもあいつも結構辛い目に遭つてたんだなあ」

沙夕「辛いなんてもんじゃない！ ひとつの失恋を10年近くも引きずつて生きてるなんてあんまりだわ」

成行「だけど、その京子つて人が、この小説に出て来るキョーコのモデルになつているのだとしたら、どうしてこういう結末にならなきゃいけないんだい」

沙夕「つまり登さんの中にいる京子さんて人はね、とても綺麗で、優しくて、この世の人とは思えない様な、理想の人なんだけど、でもそれでいて、彼女は不幸でなければならぬの、登さんの気持ちを裏切つた人だから、京子さんは決して幸せにはなれないの、なつちやいけないの。私に京子さんの代わりが務まれば良かったんだけど」

成行「でも、あいつの頭の中が今もその京子さんで一杯なんだとしたら、何だつてあいつは沙夕ちゃんと同棲なんかす

る気になつたんだろう」

沙 夕「ふつ、私なんか利用されてるだけなんです。私と一緒にいれば取りあえず食べるのには困らないからですよ」

成 行「本気でそんなこと思ってるの沙夕ちゃん！」

沙 夕「決まってるじゃない！ 京子って言う人はあの人にとつて絶対なのよ・・人が一生のうちで、心底恋する人に出逢えるのはある特定の一時期に一人だけだ。そして人が人を恋するパワーには一人一人に一定量が定められているが、僕はもうそのエネルギーの全てをある女性に使って果たしてしまつたようだ。その人の名は京子・・もうあの人にとつて京子っていう人は現実の存在を超えているの、だつてもう今は何処でどうしているのかも分からない人なのよ、もう何年も会つてないのよ、もしかしたら死んじゃつてるかもしれないのに、まだあの人の中

では高校時代の、当時のその時の面影のまま残っているんだわ。ここまで来たら、もうそれは単なる失恋の思い出とか、切ない過去の出来事で済ませられる問題ではない、登さんにとつて京子は絶対的な神みたいなものなのよ、そしてあの人意識とか精神とかを支配しているんだわ、そういうものとして存在しているんだわ、可哀相に、私に助けてあげられたら良かったのに」

成 行「沙夕ちゃん、でもやつぱり俺には、今の沙夕ちゃんのこととが哀しくてならないよ」

沙 夕「でもね私、信じてるの、いつかきつと、登さんが私のこと振り向いてくれる日が来るってね、だから私、あの人私に気が付いてくれる日まで頑張ってみるつもり。だつてそれ以外には私には生きる望みつてないのよね」

成 行「沙夕ちゃん、くっつ、沙夕ちゃん、ちくしょう・・・沙

夕ちゃんはこんなに良い子なのに、坂尾のヤツ、くっつ、許せんあの野郎・・・ブチのめしてやりたいよ！」

上手のドアがバーンと開いて登入って来る。

登「ふっふっふっふっふっ、バカめ、見ろ、ヨーグルト味だあ！」

と買って来たチエルシーを掲げて見せる。

凄い形相で登を睨みつける成行。

暗転。

六、ダン・アレックス家

マーロンはポケットから一冊の本を取り出す。

マーロン「証拠はこの一冊の推理小説さ、題名は、暗くなつたら撃て、だ。キョーコの部屋にあつた。キョーコさん、これは君の物に間違いないね」

キョーコ「ええ、確かに私のです」

マーロン「（開いて読む）私は改造した目覚まし時計を配電盤にセットし、その時刻になると一時的に家中が停電になる様に細工した。そしてその時刻には、彼は間違ひなく大広間のあの席に座っている筈である。そして、彼の座っている真正面2メートル程のところには、私があらかじめ床に張っておいた夜行性のビニールテープが貼つてある」

マーロンはかがんで床に張つてあるビニールテープをはがして見せる。

マーロン「その位置に立つて真正面へ向けて拳銃を発射すれば、間違ひなく彼に命中するであろう。後は拳銃を暗闇のどさくさに紛れて誰かに渡してしまえば、自分の罪をなすりつけることが出来る」

スカーレット「人殺し！ ジムに罪をなすりつけて、よくも 당신さんをたぶらかして私から役を取つたわね」

ジム「よせスカーレット」

ノーマン「ちよつと待つてくれよ、じゃ動機は？ 動機は何だつて言うんだ」

マーロン「それについてはどうせ湿つぽくなるに決まつてるからあまり話したくはないんだが、皆に納得して貰う為には

話さねばなるまい。実はキョーコはダンの実の娘なんだ」
ノーマン「何？ 何だつて!？」

マーション「そうなんだ、キョーコはダンが20年前に映画制作の為に日本へ行った時知り合つた芸者ガールとの間に生まれた子供なんだ。しかしダン自身、ほんの2ヶ月前にキョーコが訪ねて来るまでは彼女の存在を知らなかつた。キョーコの母つまり芸者ガールのお京さんがダンに何の連絡もしなかつたからだ。しかし父親のいない芸者の一人娘としてのキョーコの20年の月日とはどんなものだったのだろうか、これにはきつと、我々の想像には余りある苦しみがあつたに違いないんだ」

うつむいたキョーコがむせぶように泣き始める。

マーション「細かい事情に首を突つ込むのはよそう、悪戯に情にかけられるだけだからな。動機の説明としては取りあえずこれで充分だろう。つまりキョーコは20年間思い続けた瞼の父を慕つて日本からやつて来たのではなく、20年間の恨み辛みの復讐の為にやつて来たのだと言ふことさ」
ノーマン「嘘だ! そんなの嫌だ! ヤだよ、僕とキョーコが実の兄弟だなんて、ママ、ママア、僕嫌だよー酷いよー」
エリザ「ノーマン、しつかりなさいノーマン」
スカーレット「やつたわ、これで私が主役よ、ジム、主役がやれるのよ、やつたわ」

ジム「よさないかスカーレット」
マーション「キョーコさん、私には聞こえるよ、今ダンはとてつもない悔恨の念に襲われて大声を上げて泣いているよ、君には聞こえんかもしれんが私の耳をつんざく様に響き渡

っているよ」

キョーコ「ありがとう、クリップさん、貴方ってとても優しい方
だわ・・・」

見つめ合うキョーコとマーロン。

マーロン「さて、これで私の役目は終わった。後のことは警察に
知らせるなりなんなりアンタ等の好きにやってくれ、そ
れでは私は帰らせて貰うよ」

エリザ「どうもありがとうございました」

ノーマン「ママ、ママ嫌だよ、僕嫌だよ、キョーコが犯人だな
んてワァーン・・・」

泣き叫ぶノーマンの声が響く。

暗転。

佇むマーロンだけにスポットが当たる。

マーロン「泣き喚くダン・アレックスの声を背に、黙って立ち去
るクリップ・マーロン・・・この小説はここで終わって
いる。既に今私の喋っている文章は、この世界には存在
しない筈だ。だが私にはどうしても、このままこの事件
を片付けてしまうには今ひとつ腑に落ちないと言うか、
わだかまりが残ると言うか、よくは分かんないが、つまり
・・・私はキョーコが好きだ。このままキョーコを犯人と
して片付けてしまうことは、ハードボイルドとはいえ余
りにも辛口過ぎる。それに何故ノーマンはあれ程までに
キョーコが犯人であると言うことを否定するのか。あの
様子には、単に今までキョーコへの恋心があつたという

ことだけでは割り切れない何かがある様な気がする。もしかしたらこの事件には、何か奥深いもうひとつのカラーが潜んでいるのではないだろうか……」

暗転。

七、マンションの一室

チエルシーを掲げ持っている登。

登に対峙する成行。それに沙夕。

成行「坂尾、お前に話がある」

登「なんだー言ってみろ、ただし書き直しの件はさっきも言

った通りお断りだぞ」

成行「そのことじゃない」

登「じゃなんだ」

成行「沙夕ちゃんのことだ、いいか坂尾、聞いて驚くなよ、沙夕ちゃんはなあ、妊娠してるんだよ」

登「お前の子供か！」

ズッコケる沙夕。

成行「バカ、何を言ってるんだ」

登「じゃ誰んだ」

成行「お前以外に誰がいるんだよ、お前の子供に決まってるじゃないか！」

登「ホントか沙夕、ホントに妊娠したのか」

沙夕「（頷く）」

登「そうか、ふーむ（座って考え込む）」

成行「どうするつもりだ坂尾、さア、どうするんだよう」

登「産みたいか」

沙夕「（頷く）」

成行「結婚するなり籍を入れるなりしてやれよ、な、そうするつて言つてやれよ」

登「男なら和正、女なら由実つてのはどうだ、将来は歌手にしよう」

沙夕「えっ、登さん」

成行「そうか、お前子供の父親になつてもいいんだな」

沙夕「産んでもいいのね」

登「ああ良いとも、その代わり後のことは知らんからな、子供は一人で勝手に育てろよ」

成行「テツめえーそれでも男かアー！」

登を思い切り殴り飛ばす成行。

登「やりやがったなアこの野郎・よし、いいだろう、この場で勝負だ、そんなにこの女が欲しかったら力づくで持つて行けばいい・今のところコレは俺の所有物みたいなもんだ。俺の一言でどうにでも俺の好きになる代物だ。いいだろう、コレを賭けて勝負しようじゃねえか」

と二本のナイフを出し、一本を成行に投げる。

ビビリながらも自分の足元に落ちたナイフを拾つて登に向う成行。

登「その代わり死ぬ気で来いよ、命を賭けなければ自分の愛するものは手に入らないぞ、お前はそうまでして人に恋したことがあるのか、無いだろう。あーそうさ、お前なんかに分かる訳がない、あの時お前は俺を裏切ったんだ。学生時代、あの熱く夜を徹して語り明かした情熱も約束も、お前は全てを体制に譲り渡してあの頃の全てと決別した。学生時代を夢と片付けて魂を安住という名の契約に売り渡した。さア来い、俺を殺せるものなら殺してみろ、こいつを奪えるものなら奪ってみろ！」

登はナイフを右手から左手へ、左手から右手へとカッコ良くパツパツと持ち替えていたが、そのうち落つことしたところを成行にナイフを突き付けられて動けなくなる。

成行はゆつくりと登のナイフを拾うと自分のと二本とも部屋の隅に投げ、凄い勢いで登を殴る、蹴る。

成行「なんぼのもんじゃこのヤロー！ テメエなんかア、男のクズだ！ ゴミだ！ ウジムシだア、いいかアこの野郎、今から沙夕ちゃん俺のもんだ。俺はこの子のことだけじゃない、お前のことだつて考えてたんだ、二人のことを考えてたんだ！ 俺がお前を裏切つただと、大学卒業して、就職して立派に働いて何が悪いんだア、テメエにそんなことが言えるのか、良い歳こいて女に喰わせて貰わなきゃ生きて行けないお前にそんなことが言えるのかあ、ゴミ、クズ！ お前なんかア、社会にとつちや何の役にも立たないやつかい者なんだよう、何がポリシーだ、青臭い子供時代の失恋を忘れられずに引きずつ

てるだけじゃないか」

登「何？ 何だとオ」

成行「京子か、お前にとつては永遠の恋のシンボルか、笑わせ
てくれるじゃねえかよー」

登「テメエ、何でそのこと（ハッとして沙夕を見る）」

沙夕「ごめんなさい、貴方の日記帳、黙って読んじゃったの」

登「テメエ、殺してやる（沙夕の首を締める）」

成行「よせつ、こいつウ（登の首を締める）」

沙夕「やめて、成行さん（成行の首を締める）」

三人は輪になって呻きながらグルグル回る。

回転が速くなって三人弾け飛んで倒れ込む。

成行「・・・そうさ、お前はカタワだ。年を取っても心の中に

大人になれないわだかまりを残した、半分子供だ。さア、
沙夕ちゃん、行こう、もうこんなヤツ放つといて僕と一
緒に幸せになろう。こんなヤツ、浮浪者にでもなつてど
つかでのたれ死にでもすればいいんだ」

と立つて沙夕の手を引いて行こうとする成行。しか
し沙夕はピタリと止まり、成行の手を離して倒れた
登にすがりつく。

沙夕「でも、私やつぱりこの人が好き、どんなに酷く言われて
も、全然愛してくれなくつても、苦勞しても、私この人
の側においてあげる。私がいってあげなきゃダメなのこの人」
成行「なぜ・・・どうして、なんでだア！」

登「（立ち上がる）ふはははははははは、ガキはどうやらお前

の方だった様なあ成行。お生憎様だがこの女はやっぱ
り俺に惚れてるんだア」

沙 夕「そうよ、好き、大好き」

成 行「うっ、くうっ」

登 「成行、お前よく女を知らんようだから教えてやろう。何
故こいつがこうまでして俺にすがりつくと思う。それは
なア、俺のセックスが上手いからだ。いいか、女つての
は何だかんだ言ってもセックスの上手い男が好きなんだ。
つまり俺はお前よりも、セックスが上手いんだあ！」

沙 夕「よして、やめてよそんなこと言うの、嘘よ、そんなの違
う」

登 「いや、お前がそう思っているもそうなんだ。そうとも、
俺は良く知っている。女つてのは嘘つきだ」

沙 夕「（号泣する）嘘よーよして、そんなの違うわよー」

登 「何ならここで実践してやってもいいぜ」

と沙夕を押し倒す。

沙 夕「よしてよーイヤよー」

成 行「（狂った様に頭をかきむしる）うううううーっ」

登は沙夕を抱いたまま、片手をゆっくりと差し出し、
成行にVサインを突き付ける。

成行は狂った様に叫びながらドアを出て行く。
泣いている沙夕。

泣いている沙夕を突き放して机の前に座る登。
沙夕はドアの方へ行く。

登「何処行くんだ」
沙 夕「琴野さん、捜して来る」

沙 夕出て行く。
一人残った登はしばし頭を抱え込んで机の上に顔を伏せている。
呼び鈴の音、一度、二度。

登「どうぞ、開いてるよ」

ドアが開いてクリップ・マーロンが現れる。

マーロン「私立探偵のクリップ・マーロンと申します」
登「出たな」

マーロン「私が何を言いに来たかは分かってるだろう」

登「さあて、分からんね、何かな」

マーロン「とぼけるなよ」

登「とぼけてなんかいないさ」

マーロン「まあいい、では率直に言おう、結論から言えば、犯人はキョーコではない」

登「フン、バカな、何を根拠にそんなことを」

マーロン「例のダン・アレックスの顧問弁護士ハロルド・ディケインズの事務所が荒らされた一件さ、私はそのことについて調べて来た。そこで今度の事件の真犯人について重大な証拠をつかんで来たのに、そのことが小説には書かれていないじゃないか」

登「そんなものは俺の勝手だ。いいか、勘違いするな、これは俺の書いた小説なんだぞ！」

マーロン「小説の中には、小説の世界における真実というものが
あるんだ。アンタはそこから目を背けている。つまり自
分から目を背けている。そんな嘘っぱち小説だから出版
しろと言う方が無理なんだ」

登「何だこの野郎。お前は俺の書いた人物のクセに、俺に
楯突こうつてのか」

マーロン「どう思おうと結構だ。ただしこれだけは忘れるな、私
はお前自身だ。お前の書いたクリップ・マーロンだから
な、つまり私はお前の一部分だ。私がお前に言ってるこ
とはお前自身の言葉なんだ。その代わり私はお前がお前
についてお前しか知らないことも知っている。お前の過
去も、秘密も、お前が密かにつけてきた日記帳にどんな
ことが書かれているかということも、いつもポケットに
入っているチェルシーのことも、私は知ってるんだ。何

故なら私はお前の分身だからだ」

登「それで、何が言いたいんだ」

マーロン「何を恐れているんだ、私はお前自身だと言っ
たらう、
自分が怖いのか」

登「フン、バカな」

マーロン「私はお前が心の中でうすうす感づいてはいながらも無
視してきたある部分が大きくなつたものだ。つまりお前
の潜在意識というヤツさ、だがその為に今度の事件では
誤つた方向で事件が解決してしまつた。つまり、アンタ
は犯人を間違えた」

登「嘘だ、そんなことある訳はない、犯人を間違えるも何も、
これは全部俺の創造した話だ。殺人も、登場人物も、何
もかも全て、だから間違えるとかそういう問題ではない
だろう」

マーロン「よし、それでは今ここでそれを証明してやろう。皆さん入って下さい」

上手からエリザとノーマン、ジムとスカーレット、それに縄で腕を縛られているキョーコの5人が入って来る。

エリザ「クリップさん、もうこの事件は解決した筈ではございませんの」

ジム「そうだ、速く配役を決定して警察を呼ぶんだ」

マーロン「いや、皆さん誠に申し訳ない、実は私はとんでもない過ちを犯してしまつたのです。というのはその、犯人はキョーコではないということが分かつたのです」

スカーレット「何ですって！ それどういうこと」

ジム「犯人はキョーコじゃないって、じゃ誰なんだいクリップ」
マーロン「実は私は、ここへ来る前ノーマンからの電話で始めてダン・アレックスという名前を聞いた時から、何処かで聞いた名前だと思つて気にかけていたんだが、先程犯人はキョーコだと宣言して屋敷を出た直後に思い出したんだ。それは数日前に窃盗に遭つた弁護士のハロルド・デイクেনズのことさ、この事件に私は調査を依頼されたんだが、これも奇妙な事件でね、事務所はメチャクチャに荒らされているんだがこれといつて何も取られた形跡はない。結局この事件は何を目的とした犯人の仕業だつたのか分からず仕舞いだつたんだが、私はそこでダン・アレックスの名を目にしていたんだ。そう、ハロルドが顧問弁護士を担当している顧客リストの中でね。思い立つて私はこの屋敷を出たその足で彼の事務所へ向つた。ど

うしても調べてみたい気になることがあつたんでね。というのは、ダン・アレックスの遺言状のことさ、君達は皆知らなかつたかもしれないが、ダンは医者から癌の宣告を受けており、あと数ヶ月の命だつたんだ」

ノーマン「！ 何だつて」

ジム「本当なのかいそれは」

マーロン「ハロルドの事務所へ行つてみると、まず問題の遺言状はちゃんとあつたんだが、ハロルドはこうした事態が起つた時の為に遺言状を預かる時には必ずコピーを一部作つて銀行の貸し金庫に預けておくことにしていたんだ。これにはきつと犯人も気がつかなかつたに違いない、コピーと照らし合わせてみると案の定、事務所にあつたダンの遺言状はすり替えられたニセモノだつた」

ジム「それで、それには何と書かれていたんだい？」

マーロン「まず本物のコピーにはダンの膨大な財産と生前に彼の制作した映画の今後の配当金の権益については、その半分を実の娘であるキョーコ・アレックスへ、残りはエリザとノーマン、そしてプロダクションの運営金というところになつている。そして何者かにすり替えられたと見られるニセの遺言状には、ダンの遺産の全てはエリザとノーマンがこれを相続するものと書かれており、キョーコのことは全く書かれていない、つまり」

エリザ「私が犯人だつて言うの？」

ノーマン「嘘だ、遺言状をすり替えたのがママだつて言う証拠が何処にあるんだ」

マーロン「確かに、今のところは状況証拠だけだがね、だが少なくともこれでエリザ夫人にも明確な殺人の動機づけが出来ることになる」

ノーマン「何だと、パパを殺した真犯人はママだつて言うのか」
マールン「可能性の話をしているんだ、少し黙って聞いててくれないか」

スカーレット「エリザ夫人は心からダンさんを愛していらしたわ、エリザ夫人がダンさんを殺しただなんて、どうしてそんな恐ろしいことが考えられるのかしら、第一もうすっかりキョーコが罪を認めてるじゃありませんか」

ジム「そうだ、何よりの証拠だと言つて、アンタはキョーコの部屋にあつた、ダンが殺された時と同じ状況の書かれた小説を皆に見せたじゃないか」

マールン「確かにあれはキョーコのものであった。しかしキョーコの部屋にあつたからと言つて実行したのもキョーコだとは限らないだろう」

ジム「どういふことさ」

マールン「エリザ夫人はこの屋敷の部屋すべての合鍵を持っている。君達の部屋を自由に出入り出来た訳だ。もちろんキョーコの部屋も。彼女はそこで暗くなつたら撃て、という小説を見つけ、そこに書かれている殺しの方法を引用して実行した。とは考えられないだろうか、そしてその後、私に合鍵を渡して子供達の部屋を調べさせ、キョーコの部屋でその本を私に見つけさせた。キョーコに罪をなすり付ける為。なあジム、この事件が起きた時、最初に私立探偵を呼ぼうと言ひ出したのは誰だ」

ジム「アンタを呼ぼうと言つたのは僕さ、でも、私立探偵つてことを最初に言つたのは」

マールン「エリザ夫人だろう」

ジム「ああ、でもキョーコは自分で犯行を認めてるじゃないか」
マールン「そこなんだ。私もエリザ夫人に合鍵を借りてキョーコ

の部屋を調べた時、彼女の書いた日記帳を開いてみた。そこにはダンに対する抑え切れない憎しみと恨みに喘ぐキョーコの生々しい心情が切々と書かれていたよ。キョーコが殺したい程ダンを憎んでいたことは事実なんだ。そのことも私がキョーコを犯人と断定するにいたる根拠の一つになった。だが正直なところ、私にも何故キョーコが例えダンを殺したい程憎んでいたことが事実だったにせよ、自分のやっていない殺人の罪を被る気になったのか、そこに今ひとつ確信が持てないんだ」

キョーコ「もういい加減にしてちょうだい、これは一体何なのよ、私が犯人よ、もう事件は解決したわ」

マーロン「何故だ、何故そんなことを言う、君は自分で自分を不幸にしたがっている」

キョーコ「大きなお世話だわ、ほっといてよ」

キョーコの頬をひっぱたくマーロン。

ノーマン「何をするんだ」

マーロンの腕をつかむノーマンとジム。

ジム「どうしたって言うんだいクリップ、アンタらしくないじゃないか」

マーロン「くそ、すべてはこいつだ（登に）お前のせいだ！

この人をここまで追いつめたのはお前だ、この人はお前にとって永遠の恋のシンボルじゃないのか、こんな仕打ちをして何が面白いって言うんだ、こんなことをしたつてお前の過去の出来事は少しも変わりはないじゃない

か」

登「そんなセリフは、俺の小説には出てこない」

マーロン「アンタは構成をまとめる時点で俺の気持ちを無視したんだ。冷徹でクールなクリップ・マーロンがキョーコに抱く恋心がここまで大きく作品に作用しようとは思ってもみなかったんだ。そこがアンタの大きな計算ミスさ、エリザ夫人！ アンタはダンを愛してなんかいなかった。元は由緒ある家柄の出で、かつては世界的大女優だったアンタには、落ちぶれてイタリア移民のダンに拾われたという自分の境遇が許せなかった。地位と名声は失つてもかつての大女優時代につちかった高慢なプライドだけは失わずに残っていたんだ。今となつてはアンタには、たった一人の息子であるノーマンが俳優として名声を確立することだけが、かつての自分の名誉を回復する唯一

の手段と考えていた。ダンはその為に利用されたに過ぎなかったんだ。例えアンタに対するダンの愛がどれだけ深いものであつたとしても、アンタにとってダンの存在は自分の生活とノーマンを守る為の手段として必要、ただに過ぎないんだ」

ダンの声「やめろー！」

しゃがみ込むキョーコ。

キョーコ「もうやめて、父を憎む気持ちには、私の方がずっとずっと深かったのよ、もしエリザ夫人がやっていなければ、私がやっていたかもしれないわ、あの殺人方法を思いついたのも私なのよ、だからあの時、私の計画していた通りの殺人が目の前で起こった時、私はもしかしたら無意

識のうちに、私自身が実行していたのではないかと思う
たくらいだわ、だから、私が犯人でもよかつたのよ」

マーロン「だけど君は実行しなかつた」

キョーコ「勇気がなかつただけよ」

マーロン「違う、君は確かにダンを憎んでいたが、ここへ来て始めて彼に会つてみてダンが君の抱いてきた憎しみに値する様な罪深い人間だとは思えなかつたんだ。むしろダンが思いもかけなかつた娘の存在にうろたえもせず、暖かい愛で迎え入れたことに君の憎しみは戸惑いを感じていないに違いないんだ」

キョーコ「私は今まで、ダンへの憎しみだけを糧に生きて来たと言つてもいいのよ。母は、最期まで幸せらしい幸せをつかむことが出来ずに死んで行つたわ。私は、母にとつては良い娘であり、弟や妹にとつては良き姉であり、生活

が苦しくても平気な顔をして、私は人間として優等生を演じてきたのよ（顔を横に振つて）でも、そんな私を支えてきたのは私の心の奥底にある、母一人に苦勞を全部押し付けた父、ダンへの憎しみだけだつたのよ」

マーロン「君はダンを殺した本当の犯人がエリザ夫人であるということに、内心気がついていたんじゃないのか」

キョーコ「ダンには心からエリザ夫人を愛してたわ。そのエリザ夫人に殺されたなんて、そんな恐ろしいこと、考えたくなかつた。そう、そもそも私がここへ来なければ、こんなことにはならなかつたのよ」

登「いい加減なことを言うな！ この嘘つきめ、いいか、犯人はお前だ、情に訴えて言い逃れようたつてそうはいかないんだよ」

マーロン「やめろ、まだ分からんのか、ダンを殺したのはエリザ

だ」

ノーマン「違う、パパを殺したのはママでもキョーコでもない、

やったのは僕だ、僕がパパを殺したんだ！」

エリザ「何を言うのノーマン、やめなさい、違います、ノーマンは私の撃った拳銃をジムに持たせるのを手伝っただけなんです」

ハツとして口を押さえるエリザ。

唾然としてエリザを見つめる登。

登「そんなっ……バカな……」

ノーマン「ママ……」

マーロン「エリザ夫人の誤算はノーマンのキョーコに向けられた恋心だ。貴方は最初から殺人の罪はキョーコに着せるつ

もりだったが、それをノーマンに話せばきつと反対するに違いない、そこで貴方は考えた。ノーマンにはジムを犯人に仕立てると話しておく、そして私立探偵が来て調べていく過程で、貴方の仕組んだお膳立て通り事が運べば、犯人はキョーコと言うことになる。そうなればノーマンもきつと諦めるだろうと思っていた。その上ご丁寧にキョーコは私が犯人ですと、偽りの自白までしてくれた。事は完璧に運んだかに見えた。ところがノーマンは、自分の好きなキョーコを犯人に仕立てることに對して堪え難い良心の痛みを感じてしまった。私が誤った推理でキョーコを犯人と断定した時の異常なまでのノーマンの拒否反応は、私がこの事件に新たな展開を予期するきつかけになつた」

反射的に拳銃を出してキョーコに向けるエリザ。

エリザ「キョーコさん！ 貴方さえ、貴方さえここへ来なければ、
こんなことにはならなかったのよ！」

マーロンが懐から拳銃を出してエリザを撃つ。
銃声がして倒れるエリザ。

ノーマン「ママっ！ ママー！」

駆け寄るノーマン。

キョーコを抱き寄せるマーロン。

スカレット「エリザ夫人！ そんな、映画は、映画の主演は？」

私よ、私が主演よ！」

取り乱すスカレットを引つ叩くジム。
ジムにすがりついて泣くスカレット。
登が茫然としてよたよたと舞台中央へ、頭をかきむ
しって叫び声をあげ、ぶっ倒れる。
キョーコの縄を解くマーロン。
エリザの手を取るノーマン。
虫の息のエリザ。

エリザ「ノ、ノーマン、ノーマン……」

ノーマン「ママ、僕はここにいるよ」

キョーコ「エリザ夫人、ダンは、ダンは本当に貴方のこと、愛し
ていらしたんですよ」

マーロン「あの世へ行ったらダンに会って聞いてみると良い、ダンがアンタを心から愛したことへの仕打ちとして、自分を撃ち殺したアンタのことを恨んでいるかどうか。それからノーマン、君のことも、ダンは憎んでなんかいなかった。愛していたのに、エリザ夫人はダンから君を独占する為に君がダンを憎む様な嘘をついて、君が父親から離れて行く様に仕向けたんだ」

ノーマン「ええっ、そんな、ママ、本当なの」

マーロン「エリザ夫人、アンタの母親としてのせめてもの罪滅ぼしに、ノーマンに本当のことを言っただけでやっただろうかね」
エリザ「ノーマン、ダンは、貴方を憎んでなんか、いなかったわ

・・・（事切れる）」

ノーマン「そ、そんな、ママッ、ママァー！（泣く）僕は、ママと一緒に、パパを殺して、映画の主演を、取るつもりだっ

たんだ。財産や、遺言のことは知らなかった。ましてや、キョーコが、実の姉だったなんて、ごめんよジム、僕は君に罪を被せて、犯人に仕立てるつもりだったんだ」

ジム「もういいさ、終わったんだ・・・」

スカーレット「映画は？ 映画の契約書はどうするのよ」

ノーマン「クリップさん、僕はどのくらい刑務所へ入れば良いんだらうか」

マーロン「君は今まで、エリザ夫人の言いなりになつて育ってきたんだ。それに実質的にも君はエリザの使った拳銃をジムに持たせるのを手伝っただけだ。むしろこのことは君にとつても悲劇だった。いや、そもそも君自身もエリザ夫人の君に対する異常なまでの溺愛の被害者だ。情状酌量ということも考えられると思うがね」

ノーマン「僕は、愛してくれたママのことは憎みたくはないんだ。

ただ、僕は。パパが本当は僕を愛してくれてたということ
を、パパが生きているうちに知りたかったよ。今思っ
ただけど、パパが、映画の制作業務を、僕に継いでく
れる様に望んでいる様な気がして」

マールン「ああ、確かに今ダンが君にそう言ったよ」

ノーマン「でも、僕に出来るだろうか」

マールン「出来るさ、ダンの志を継いで君がプロデューサーとし
て哀愁を完成すれば、ダンにとってこれ以上の供養はな
いはずだ」

ノーマン「うん」

ジム「ロイの役は僕にやらせてくれるね」

ノーマン「もちろんだよ」

ジム「それから、マイラ役はキョーコだ」

スカレット「何を言うのよジム！」

ジム「これはダンの要望だし、僕もキョーコの方が適役だと思
うよ」

スカレット「そんな、酷い、貴方私を愛してないのね」

ジム「バカ！僕は君を愛している。でも映画を作ると言うこ
とはそういうこととは違うんだ。いいか、君は地位と名
声が欲しいのか、かつてのエリザ夫人の様に、みんなか
らチヤホヤされたいだけなのか、それとも一人の役者と
して、映画というひとつの歴史的な出来事に参加するの
か、どっちだ！僕はこの映画が完成したら、一度田舎
へ戻る。両親や家族に会って、もう逃げたりせず自分
を理解してもらえらるまで頑張るつもりだ。その時は、君
も一緒に来てくれるね、スカレット」

スカレット「ジム」

ジムに抱きつくスカーレット。
瞬間舞台全体が暗くなると同時に倒れている登にス
ポットが当たる。

登「なア、クリップ……」

マールン「何だい」

登「一つお願いがあるんだが、聞いてくれないか」

マールン「何も遠慮することはないさ、ここはお前が創造した世
界じゃないか」

登「キョーコさんと、キョーコさんと一曲、踊って欲しいんだ」

マールン「……（キョーコに）どうする？」

キョーコ「……」

マールン「ヤツを憎むか」

キョーコ「いいえ、私への強烈な愛を感じるわ、憎しみと紙一重

の」

マールン「それじゃ、いいのか」

キョーコ「ええ」

マールン「だがな登、ここにいるキョーコはお前の好きだった京
子さんではないんだぞ、お前の創造した小説の中のキョ
ーコにすぎないんだぞ、それでもいいのか」

登「いいんだ、これは、俺自身の、自分との決別なんだ」

登立ち上がる。

キョーコ、ゆっくり側へ。

登「あ、あの、音楽はニーノ・ロータにしてもらえないだろ
うか」

マールン「フツ、勝手にするさ」

と去る。

他の者達も去り、舞台には向かい合う登とキョーコの二人だけになる。

音楽「ゴッドファーザー・ワルツ」流れ出す。

ぎこちなく礼する登。

応じるキョーコ。

互いに手を取ってワルツを踊る二人。

暗転。

再び灯りが灯ると見えない人を相手に一人で踊っている登。

暗転。

八、映画「哀愁」

映画「哀愁」のラストシーンからそのまま抜け出て来た様なマイラ（キョーコ）がとぼとぼと歩いて来る。

通り過ぎるトラックの轟音と共にヘッドライトの眩しい光りがマイラの顔を過ぎつて行く。

走るトラックに飛び込もうとするマイラの気持ちが高まってきたところでイギリス軍人のロイ（ジム）とキティ（スカーレット）走って来る。

ロイ「マイラ！」

マイラの腕をつかむ。

マイラ「ロイ！ キティ」

キティ「マイラ、ああ、無事で良かった」

ロイ「マイラ、君は酷い、僕に黙って行ってしまうなんて」

マイラ「やめて、ロイ、どうして私を黙って死なせてくれなかつたの、こんな私を、貴方に見られたくなかつたのに」

ロイ「よすんだ、君は生活に困っていたんだ。生きる為には仕方なかつたんだ。過去に何があつたつて、君は君じゃないか、僕が愛しているのは今日の前にいる君以外の誰でもないことに変わりはないんだ」

マイラ「でも、私お母様に本当のことを話してしまつたのよ」

ロイ「何故だ、黙っていてくれれば良かったのに・・・」

一瞬、ロイを見つめたマイラはロイを突き飛ばす。

マイラ「そんなこと出来なかつた。私には、あんな良い方達を騙し通すことなんて、きつと出来やしなかつたわ」

ロイ「それなら、僕と母さんだけの秘密にしておけば良いじゃないか」

キティ「ロイ、貴方自分の言っていることがどういうことなのか分かつてるの？ 貴方マイラに、これから一生涯貴方の家族に後ろめたさを隠して生きて行けつて言うのね、酷い人、貴方本当は、もうマイラのこと、愛してなんかいないんだわ」

ロイ「違う」

キティ「いいえそうなんだわ、結局貴方はいいとこのお坊ちゃんなのよ、何よりも家柄と名誉を重んじる。そうよ、身寄

りもないゴミみたいな売春婦を妻として迎えるなんてこと、絶対にあり得ないんだわ」

マイラ「やめてキティ、私、やっぱり死にたいわ」

キティ「ダメよ、どんなに苦しくたって、やっぱり私達生きなくちゃ、さあ行きましょう、そのうちきつと、良いこともあるわ」

マイラを連れ添って歩いて行くキティ。

立ち尽くすロイ。

ロイ「待つてくれ！」

立ち止まるマイラとキティ。

軍服のボタンを外し、荒々しく脱ぎ捨てるロイ。

ロイ「これでどうだ、君が僕の家へ入れないと言うのなら、僕があの家から出れば良いんだろう。もう家柄も、階級も、名誉も何もかもたくさんだ。君をこれ以上苦しめるくらいなら、僕は喜んですべてを捨てる。これからは君の為にだけに生きる、生きてみせる。頼む、僕のところへ戻ってくれ、僕には君が必要なんだ。他の何を失っても、君のことだけは失いたくないんだ！」

マイラ「・・・ロイ」

ロイ「マイラ！」

マイラ駆け出してロイの胸に飛び込む。ひっしと抱き合う二人。

音楽盛り上がる。

暗転。

九、工事現場

工事現場の騒音。

工事現場によくある黄色と黒のシマシマのつい立。
ヘルメットを被り、ドカタズボンに地下足袋姿の登
がツルハシを振り下ろしている。
成行が来る。

成行「よう」

登「おう、成行か」

成行「何だつて気を変えたんだい」

登「上手く説明出来ないよ、すべては俺の頭の中で起こった
出来事さ」

成行「けど何もドカチンやることはないんじゃないのか、お
前が考えを変えてくれたお蔭で本も売れたんだし」

登「いや、この方がいかにも働いてるつて実感が湧くんだ。
このマメ、この汗、腰の痛み、分かるか、俺は余りにも
罪深い人間だった。これからは沙夕の為だけに生きるよ」
成行「もう書かないのか」

登「（頷く）」

成行「第一作の読者から坂尾登の第二作を求める声が上がって
るんだがな、うちの社長も乗り気だし、もしまた気が変
わって書こうつて気になったら、その時はまたすぐ連絡
してくれよな」

登「ああ、ありがとう」

成行「ひとつ不思議なことがあるんだけどな、登の書いた最初のダン・アレックス殺人事件は犯人がキョーコだっただろう、でもそれじゃあまりに救いがなくて結末が暗いからって書き直したんだよな。それで確かに本は売れた訳だけど、おかしなもんで読者の感想を聞いてみると、確かに結末はハッピーエンドに終わってるけど、けど何かとてつもない寂しさと哀しみに満ちているって言うんだ」

登「……………」

成行「分かるんだな、きつと、お前の本当の気持ちが読む人に伝わったのさ、不思議だな……」

登「成行」

成行「え」

登「歳を取るってなアもしかしたらひとつづつ望みを失って

くことなのかもしれないな、欲しかったものが手に入らないと分かって、気が付いたら別のものを手にしてるんだ。でも人間は、自分の欲しかった物なんて何処にも存在しないということに、なかなか気が付けないんだな」

成行「ホントにお前、一体どうしたって言うんだよ、まるで人が変わったみたいだぜ」

登「そのことに気が付いたのさ。人間一人が一生かかっても出来ることなんて、大体たかが知れてるんだよな、俺は沙夕を幸せにする。そのことで一応一人の男としての役割を果たすことにしたんだ。この前さ、ホラ、あいつがいつも欲しがってたピンク色のリボン、誕生日の日に買ってやったんだよ、したらもう涙ぐんで喜んじやっつてな、ビックリしちゃったよ、それっばかりのことで何がそんなに嬉しいんだろうと思っつてな、女つてのは単純な

んだな、だけど、あいつの幸せそうな顔を見ていたら何だか俺も嬉しくなってきたな、あんなのは始めてだ。いや、今更そんなことに気が付いちやつたのさ、人の幸せってのは、昔の俺が考えていた様に決して大それたことではなくて、ホントはほんのごく小さいな行為の中にあるものなのかもしれないな」

成行「そうか、良かったな、でももうお前が書くのをやめちゃうたのは残念だよ、また気が変わったらいつでも言うてくれよな」

登「ああ」

成行「じゃな」

登「じゃな」

成行去る。

再びツルハシを振り上げて仕事を始める登。

沙夕の声「アンター」

沙夕来る。大きなお腹、頭にはピンク色の大きなリボン。水筒と弁当を持っている。

沙夕「お弁当持って来たわよー」

登「おう、もうそんな時間か、早いな、どれ」

登はツルハシを置いて沙夕の敷いたシートに腰を下ろす。

沙夕「ホラ、アンタの好きな玉子焼きとソーセイジ」

登「おやおや、好きだからって毎日これじゃねえかよ」

沙夕「だって、毎日おかず考えて作るの面倒なんだもん」

登「こいつ、横着しやがって」

沙夕「エへ」

登「お前は栄養あるものちゃんと食べなきゃダメだぞ、お腹の子供のこととも考えなくちゃならないんだからなア」

沙夕「ンもう、分かってるわよう、ア、いけない私、水筒の
中身入れて来るの忘れてきちゃった」

登「バカ、おつちよこちよい」

沙夕「ごめんね、すぐその辺で何かジュース買って来るわ、ち

よつと待ってて、ア、小銭ある？」

登「お（ポケットから出す）」

沙夕「じゃ、ちよつと待っててね」

沙夕、行く。

入れ替わりにクリップ・マーロン登場。登を指差して話し出す。

マーロン「微笑み、労働、そして春の陽だまりの中で食べる妻の手作りの弁当。そこには明日へと向う新しい生命が宿っている。今までに見向きもしなかったこのたわいなき人間の生活がこんなにも素晴らしいものだったとは、私は今、違う人間になったのか、それとも始めて本来の姿に返ることが出来たのか、私は負け犬なのか、それとも幸せをつかんだのだろうか（手を下げる）今お前の頭に浮んだ文章をそのまましゃべってみただけさ、やはりお前は物書きだ、生活が変わっても、例え何処で誰といようと、お前の頭の中は文章で一杯だ。浮んでは消え、浮

んでは消え、お前にとつては見たこと聞いたこと、今感じていることのすべてが文章なんだ。はやりお前は物書きだな、本当はまた書きたくてしょうがないんだろう」

登「俺はまだ以前の俺にこだわっている訳じゃない、以前の俺を捨てきれずにいる訳じゃない、違うんだ。俺は今の気持ちを、以前とは違つた今の気持ちを書きたくなつたんだ」

マーロン「（登を指さして）私は今まで、私がこんなにも優しい人間だつたとは思つてもみなかった。私は今、優しくなれる自分に限りなく嬉しさを感じる。私の言葉に微笑み返してくれる沙夕の顔に、これが幸せというものなのかと感ずることが出来る。私は今やつと、たつた一人の人間を愛することを覚えた。そしてまたこれからは、もつと多くの人を愛せる自分になれたらと思う。そう思つた

時、私は始めてこんなにも救われた気持ちにある自分を発見することが出来た（手を下げる）」

登「俺は今やつと、さアここからだ、つてどこにたどり着いたところさ」

マーロン「お前はまだまだこれからさ、だけど嬉しくて仕様がな

いんだろう」

登は笑つて頷くと右手の親指を立てて見せる。

マーロンも笑つて右手の親指を立てて見せる。そして去つて行く。

缶ジュースを二つ持つて沙夕が戻つて来る。

沙夕「ごめんね、待つた、ハイ、これどつちがいい？」

登「うーんと、こつち」

沙 夕「ハイ」

二人、座って缶ジュースを飲む。
桜の花びらが天井から降って来る。

沙 夕「きれい・・・」

登 「ほんとだ」

音楽盛り上がって、桜の花びらに包まれている二人。

おわり